



教職大学院 Newsletter

No. 63

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2014.5.17

三位一体改革と新たな教職大学院の展開

福井大学理事（教育・学生担当） 寺岡 英男

国立大学が法人化され、第2期も今年度を含めあと2年となったいま、第3期を睨んだ改革の加速が求められています。第3期では、「持続的な“競争力”を持ち、高い付加価値を生み出す国立大学へ」が目指されています。国立の教員養成系学部・大学は法人化される以前からずっと縮小・再編に晒されてきました。これは国の教員養成政策の問題性と共に、教員養成を担う側が新たな改革を提案し切れなかったことに因ると言えます。第3期の目標は果たして教育といういとなみに馴染むのかと思うところもありますが、いずれにしてもこれまで以上の厳しい状況が待っているのは事実です。生き残るためではなく、これからの社会の中で求められる子どもの学びを実現するために、専門職としての教師の、生涯にわたる力量形成を支える教師教育改革の仕組みを提案し、改革し、実績をつくり出していくことが、私たちに求められています。国は、この間の福井大学教職大学院の取組みと改革構想（「三位一体の改革」）を評価し、国立大学機能強化の予算を付けてくれました。本ニュースレターNO.57の巻頭言で松木専攻長（当時）がその内容を紹介していますが、以下では、三位一体改革の意味を、私なりに整理してみたいと思います。

その1つは、「学校拠点方式」の新たな展開であることです。福井大学の教職大学院は、学校拠点に教師の協働実践力を培うことを目指し、新たな組織とカリキュラム編成で取組みを進めてきました。今回の三位一体改革は、附属学校との関係でいえば、協働から「一体」へと関係・機能をより発展させるものです。附属学校は、これまでの実習校から大学と一体性を強めた教員養成校へと発展するとともに、4つの附属学校園がよりつながった教育をめざします。さらに、専門職大学院の設置によって導入された「実務家教員」

というカテゴリーとは別に、それを発展させた意味をもつ「研究実践者教員」が提案されています。豊かな実践経験や識見を大学教育に生かす実務家教員は、基本的には職場から離れ大学教員になっているわけですが、研究実践者教員は、職場から離れずそこでのリーダー的な役割を継続したまま、教職大学院の専任教員となります。

第2は、教育委員会との協働の新たな展開です。国立の附属学校の教員人事は、その多くが県の教育委員会の主導の下、交流人事として行われています。福井県の場合では、基本的に7年間の附属学校勤務を終えれば、公立の学校等に戻ります。「研究実践者教員」については、この附属に勤務する期間の延長も含め弾力的に扱われます。また、この改革では、附属学校に管理職養成をめざす1つのコースとしての機能を持た

内容

- 三位一体改革と新たな教職大学院の展開 (1)
- 上海師範大学の訪問調査団報告書 (2)
- Staff 紹介 (10)
- 院生紹介 (13)
- 研究紀要・実績報告書の紹介 (16)
- インターンシップ/
週間カンファレンス報告 (17)
- 4月合同カンファレンスに参加して (19)
- ラウンドテーブル案内 (22)
- 福井大学教員免許状更新講習について (26)
- 書評 (27)
- 教育研究会のご案内 (27)
- 教育学研究科学生募集スケジュール (28)

せ、そのため教職大学院に専任のポストを設けています。

第3は、国の政策として打ち出されている修士課程の見直しと教職大学院化との関わりです。教職大学院は、これまでの教科教育を中心とした修士課程への厳しい批判の中で、新たに専門職大学院と言う枠組みを使って制度設計されました。そこに教科教育をどう組み入れるかは難しい課題です。一方で、教員養成の教員数は多いということで、大括り化による縮減が待っています。そうした中で、附属学校に新たに置かれた研究実践者教員を始め、三位一体改革で採用するポストの教員の一部は学部の教科教育の授業も担当する予定で、そうした試みの積み上げの上に教職大学院化が目指されればと思います。

第4は、いま大学に求められるグローバル化の中での教師教育の展開という課題です。すでに学校拠点方式による全国的な教師教育改革ネットワークは、10を越える大学・教育委員会の参加により機能していますが、併せて米国、中国、フィンランド等との海外との交流を継続してきています。これを発展させ、学生・院生（現職教員も含む）の海外派遣と受入れや交流人事を一層実現すること、さらには昨年から全国から10に上る高校（うち3校はSGHに採択）と取り組んでいる高大接続・交流の事業について、大学のみならず高校からの学びの転換、それに基礎をおく入試改革に結び付けて行きたいものです。

上海師範大学の 訪問調査団報告書



中国での授業参観から

福井大学教職大学院 准教授 小林 真由美

10年ほど前に訪れたことのある上海であったが、観光目的で訪れた前回とは違って、中国という国が教育を通して何を目標そうとしているのか、ほんの少し見えた気がしている。3泊4日の中身の濃いスケジュールの中で、私が印象に残るのはやはり学校の授業であった。最初に訪れたのは「上海市楊浦高級中学」という高等学校である。上海では1、2位を争う進学校とのことで、中国では小学校1年生からスタートするという英語の授業を参観した。休み時間というのに全員が席に着き自主学习に取り組む。問題集に書き込む姿は、日本の受験生のようなものである。チャイムで授業がスタートする。2つつ机をくっつけ縦に5列、横に8列の40人くらい。Readingの授業でももちろん教師も生徒もAll Englishである。しかも相当なハイスピードで、私の陳腐な英語力では半分以上が聞き取れない。聞き取りができないと授業の見取りも十分できず、ただただ圧倒された。初めは「この人について知っていることは」的な話から始まり、アルフレッドノーベルが電子黒板に表れる。若く美しい女性教師から、流暢で息も継がせぬEnglishシャワーが浴びせられる。教科書を確認することはせず、内容に



についての問いが次々投げかけられ、生徒は緊張した面持ちで聞き入る。聞いていないと答えられない。次々と指名していくが言葉に詰まる生徒もおらず、彼らもまた流暢な英語で答えていく。電子黒板を駆使してきれいに流れていく授業は、おそらく彼女の筋書き通りなのだろう。しかし、退屈そうな表情の生徒は誰一人も見あたらず、むしろ必死についていこうとしている。以前テレビで見た入試直前の塾の合宿講座の風景が脳裏をよぎっ

た。ノーベル自身に関する質問から「彼はなぜノーベル賞を設立したのか?」と「ノーベル賞」に話が移り、キュリー夫人、カーター大統領等ノーベル賞受賞者に関して「いつ、どんな分野でノーベル賞が贈られたか」を答えさせながら文型を練習する。ほとんど一問一答式のやりとりが続くが最後に来てノーベル賞授与式の話になると「なぜ若い人たちをこの授与式に招待するのでしょうか?」とオープンな質問が提示された。グループで考えを話し合うがやはりここでもEnglish onlyである(それこそ私には聞き取れないが・・・)。グループ代表者はいっそう流暢に語る。研究者としての将来が約束されるからといった第三者的な意見は少なく、「さらなる研究意欲が喚起される」「face to faceで受賞者とコミュニケーションできる」「世界の将来の利益に貢献できる」など自分がその授与式の場に招かれた者としての意見が自信満々に語られる。最後に語った女の子はとりわけ流暢で、「革新の旅に自分に関わることができる」と詩の一節のような答えで、さらにそれに頷く生徒の姿に驚異を覚えた。彼らにとってノーベル賞は手の届かぬ遠いものではないのだろうか。海外の大学への進学者も多いと説明を受け、納得したと同時に、日本の高校生とのレベルの差を知り、妙な焦りを感じた。

次に見た音楽の授業ではコンピュータを使って作曲を行っていた。音の波形から和音を組み合わせ、グループで作っているのだろう。しかし、このあたりから少し違和感を感じ始めた。歌わないのか?演奏しないのか?コンピュータの画面だけで音を作り上げる姿は、流暢に次々と答えていく英語の時間の姿とも重なって、なんだか自分がやってみたいという気が起きない。日本ですばらしい授業を見たときにいつも感じるわくわく感が湧いてこない。きれいに流れるし生徒も一生懸命学んでいる。きれいすぎるのか。日本の教室に入ったときに感じる雑多な、でも確かに生きている授業の息吹が感じられないのである。それは翌日の附属小学校の授業でも同じだった。図工の授業では「夏祭り」を題材に、サインペンで提灯とそこに集う人たちを、お手本に従って丁寧に丁寧に描いていく。子どもたちの目は真剣で誰一人いい加減に描くものはいないので、どの子の絵も美しい。算数の授業では9. □6 > 9. □7に何が当てはまるかと問われて両方に1と答えた少年の解答をみんなで修正しながら、右辺を0とすれば良いことに気づき、答えは1



つではないことをつかんでいく。学びの深い良い授業なのに何か引っかかる統制感は、自分の先入観だろうか。体育の授業はいわゆる体操であった。「楽しい体育」ではなく「鍛える体育」で逸脱する子は私には一人も見つけられない。「学ぼうとしない子」がいないのである。後の校長先生との懇談の中でも生徒指導的な話は全く出てこない。「不登校」も「いじめ」も学校の問題ではなく(陰にはきっとあると思うが)それを取り上げて何とかしようとは思っていない。溢れる者は掬わない、溢れる者は溢しておくのだろうか。すべての子どもたちに楽しい授業を!と教師が必死に努力する日本の授業はどこか雑多で、どこかごたごたで中国の授業のような美しさが無い。中国では、徹底的に上位の子どもを伸ばし、しかも自国にとどまらず、ある意味食欲に世界に出て行かせる。校長先生によれば常に「子どもたち一人一人が世界にどうやって役に立てるか」を考えているとのこと。その陰にいる多くの、その他の子どもたちはどうなっているのだろうか。流暢に英語を駆使する高校生と裏腹に、ホテルの受付係は「Where is the toilet?」「Can you speak English?」さえ通じない。追い抜かれるかも、と焦った気持ちは消え、日本の目指す教育はこことは違うのだと納得した。

何の説明もなく3時間も遅れた飛行機でようやく日本に着いた。ウォッシュレット付きのきれいで温かな便座と精一杯まで手足を伸ばして入る風呂にほっとしながら「外国に行くとき一番感じるのは、日本っていいなあってことだよ」と言った外国旅行好きの友人の台詞を思い出していた。

上海視察を通じて

福井大学教職大学院 特命助教 半原 芳子

去る3月16日～19日上海師範大学訪問調査のため総勢11名の教職大学院のスタッフで上海を訪れてきました。霞んだ空に向かってぐんぐん伸びるように林立する高層ビル群、滑走路にもなりそうなほどの広い道路を

激しく往来する車やバイク、けたたましく鳴るクラクション、そして人・人・人。そしてなんといっても街中に立ち籠める独特の熱気と活気。一体そうした「熱」はどこから来るのだろうかという私の疑問は、視察を通じて

出会った先生方の話を聞いて払拭されていきました。先生方の話の中に幾度となく出てくる“future” “development” “power” “energy”という言葉。「世界で通用する人材を育成する」（楊浦高級中學・向校長）ため、2400万都市上海は話に聞いていた以上に教育熱が高まっていると感じました。ここでは、その上海の教育の一端をお伝えすべく、視察中印象に残った上述の楊浦高級中學における英語の授業を取り上げたいと思います。

楊浦高級中學は楊浦区にある附属高等学校です。これは帰国後知ったのですが、同区は復旦大学など重点教育機関に指定されている大学とそれらの附属学校が立地していることから「知識の楊浦」と謳われているようです。楊浦高級中學は大学のキャンパスかと見紛うほど広大な敷地を持つ煉瓦色の校舎と緑のコントラストが印象



的な学校で、生徒数は1200人ほど、教師も100人以上にのぼることでした。私達はあるクラスの英語の授業を見学する機会に恵まれました。先生が教室に入りチャイムが鳴ると同時に授業開始。20代後半から30代前半と思われるその若い女性の先生は英語が非常に堪能です。授業はすべて英語で進んでいきます。さっきまで中国語（上海語）でおしゃべりしていた学生の間にもピリッと緊張が走ります。その日はノーベル賞について書かれた読み物が教材でした。先生はテンポの良い

授業、生徒が退屈しない授業を心がけているのでしよう。電子黒板ではアニメーションを駆使し、読む時間や考える時間も「3分」（実際は1～2分ほど）と区切りながら、“quick, quick”というかけ声とともにテンポよく授業を進めていきます。もちろん、スピードについていけず考え込む生徒や先生が思っていたのとは違う答えを述べる生徒もいます。そうした生徒達に先生は「また後でね」「それも一つの答えね」と彼らの心理的負担を軽減すべく声をかけます。あっという間の50分。見学者である私もいつしかそのリズムカルな授業に引き込まれ「ああ、よく集中して勉強した」と心地よい頭の疲れを感じました。でも教室を出た後、ふとこの授業はどこか予定調和的、もう少し言えば先生がデザイン（モデル化）した学習過程（認知過程）を生徒がなぞる、そうした印象を持つ授業だなと思いました。「世界で通用する人材」とは一体どういうことを言うのか、そして、そこに第二言語教育はどのように関わっているのか。対象言語は違えど同じ第二言語教育に携わっている私の中に、これから考えていきたいと思える大切な問いが生まれた貴重な授業見学でした。

また、街では多くの出稼ぎ労働者と思われる方達を目にしました。ビル建築などに従事しているのでしょうか。上海は厳しい戸籍政策をとっており上海戸籍を持つ子どもしか上海の学校に入れないそうです。上海師範大学第一附属小学校の曹校長に労働者の子ども達の教育はどうなっているのか個人的に質問したところ、議論はされながらも具体的な解決策が見出せていない状況であると悲痛な面持ちで返答くださいました。PISA上位の上海にあっても大きな教育的課題があることを知りました。

今回の視察は、私にとって第二言語教育のあり方を含め広く自分の国の教育、隣の国の教育、そして世界の教育のあり方を考えるきっかけとなる非常に有意義なものでした。このような機会をいただき感謝しています。また、滞在中体調を崩した際一緒に行ったみなさんからのご親切が温かく何よりももの薬となりました。ここに記して御礼申し上げます。

若き校長のリーダーシップに期待

～上海師範大学第一附属小学校を視察して～

「私は若いが、それだけpassion（情熱）があります。校長として学校をよくするために情熱を持って取り組むことができます。」

上海滞在中3日目に訪れた上海師範大学第一附属小学校の意見交流会の冒頭で、曹校長はこのような自己紹介をされた。曹校長は、30代かと思えるような若さだったが、校長としてのまさしく情熱と自信が伺え、

私は大変爽やかな印象を持った。校長には、どのような学校にしたいか明確なビジョンを描くことと、その実現に向けて信念をもって実践する実行力と、組織を動かすリーダーシップが必要であるが、曹校長先生のその後の話や学校の様子から、それらを強く感じる事ができた。

この上海師範大学第一附属小学校は、附属という名

は付いているが、近隣に住む子どもだけが通う公立の小学校だそうである。森先生がエリート化している日本の附属学校の状況を伝えると、曹校長は、成績優秀者を集める日本の附属学校の入学選抜を批判し、入学時の成績の善し悪しでなく、子どもの将来の発展性を考えるべきだと主張していた。この学校では、子どもたちの将来を考え、知識の学問だけではなく、芸術教育活動を多く取り入れ、創造性など子どもたちの未来に生きる力を育てているという旨のことを話されていた。実際、学校の廊下や階段の至る所に生徒の図画作品があふれていたり、子どもたちの自立的な学習を大切に考え、電子パネルを休み時間に開放し、興味のある教科の学習ゲームなどもできるようにしたりしていた。また、子どもたちの心のケアも大切にしており、屋上には子どもや親との教育相談にも利用する場として、ウッドデッキのベランダに木製のベンチやブランコも設置し、相談しやすい空間を創り出していた。

ところで、曹校長は、以前は私立の学校で勤務しており、おそらくその学校での実績と手腕を買われての異動だろうと思うが、教育委員会から命じられてこの公立小学校に校長として赴任してきたそうである。曹校長は、私立に比べ公立ではやりたいことについての制約があり、もし今私立の学校の校長と公立の学校の校長とどちらを希望するかと問われれば、自由度の高い私立と答えると冗談のように話しながらも、大事なことは、学校のために何ができるかを考え実行することだと明言する。そして、何かをやろうとするときに校長として大切なことは、やりたいことを伝えるだけでなく、それを校長自身が行動で示してみせることだ。そうすることで先生も親もついてくると熱く語る。その一例として、次のような制服導入についてのエピソードを話してくれた。

「私立の学校からこの学校に校長として赴任したとき、子どもたちが制服を着用していなかったのが、制服にすべきだと提案しましたが、授業料から学習用品まで学習に必要な物は無償（無料）の上海市にあって、制服は対象外で保護者負担だったこともあり、お金がかかるなどと保護者や先生から反対がありました。でも、子どもたちが毎日様々な色やタイプの違う服を着て登校するという、かえって費用のかかる実態をみて、やはり制服にしなければと考え、まずは1つの学級から始めました。そして少しずつ学級を増やしていくと、そのよさが伝わりどんどん広がりごらんのようになり全員が制服になったのです。今ではだれも不満を言いません。」その後、制服が無償支給となるように市教委にも働きかけをしているようで、いずれ市教委負担で無料化にできるだろうと自信をもって話していた。校長の情熱と信念、そして行動型のリーダーシップが学校改善に大きく関与することを再確認した。

学校改善という点で様々な実践を仕掛けている曹校長だが、問題意識ももっておられた。その一つが教師の資質改善である。子どもの心理面まで考えることを

せず、実務的な指導だけで終始する教師、また、子どもから間違いを指摘されても自身の誤りを認めない教師が多いという。もっと子どもとのコミュニケーションを大切にし、子どもの思いを受容し理解できる教師を育てていかなければと語る。教師主導で教え込む風潮の強い学校の状況を、少しでも子ども主体の学校にしようとする校長の思いを感じた。

実際に参観した図工と算数と体育の授業では、大人数の学級にもかかわらず、どの授業でも学習規律ができており、子どもたちも真剣に取り組んでいた。しかし、子ども同士、あるいは教師と子どもがコミュニケーションをとりながら深めていく授業ではなく、教師主導で教え込む一斉型の授業であった。業間に行っ



ている目の体操では、校内放送による指示に合わせて、どの学級でも全員がシンクロしているかのように一斉にそして的確に、目、頭、首と視力回復のつぼを次々とマッサージしていく姿に感動さえ覚えた。子どもたちにとってよいことは組織的に徹底して行うという点では、我々も大いに学ぶところがあったが、子どもたちの探究的な学びや協働の学びなど、子どもの主体的な学びの姿は残念ながら見ることはできなかった。

意見交換会で話題になり分かったのだが、グループ活動での子どもたち同士の学び合いや、個々の能力に応じた指導については、大きな学級では難しいと、曹校長自身は考えているようであった。また、教師同士の学び合いについては、上海の小学校は日本と異なり教科担任制であることから、同じ教科の教員同士の研究会はあるが、福井のように教科を超えて教師同士が学び合うような研究会はレベルが高すぎるという認識であり、学校として取り組む必要性を感じていないようであった。

校長のリーダーシップが学校を変える強い原動力になることを考えると、今後ぜひ、曹校長自身が、子どもの協働の学びの大切さを理解し、子ども同士や教師と子どもがコミュニケーションをとりながら深めていく授業となるよう、授業改革にリーダーシップを発揮してほしいものである。そして「教師と子どもが『教える－教えられる』」の関係ではなく、「子ども同士、子どもと教師、教師同士が『共に学び合う』」学校づくりを、更に目指していくことを願っている。言うまでもなく、これは、私たち福井の教員の目指すところでもある。

2つの視点から見た上海

福井大学教職大学院 特命准教授 前園 泰徳

1. はじめに

まずは貴重な視察の機会をいただいたことに感謝いたします。発展著しい上海の雰囲気と、それを担う勢いのある教育の現場を見せていただいたことは、私にとって大きな刺激となりました。旅程や各訪問先における質疑応答の内容等はすでに他の方が記しておりますので、私は劇的な社会変化への教育の対応と、E S D（持続可能な発展のための教育）という2つの視点から上海の教育について報告します。

2. 社会変化への教育の対応

上海は、長江河口の平坦な低地に形成された国際都市です。行きの飛行機の着陸時に見た広大な平野とそこに建つ高層ビル群が大変印象的でした。そこには、東京都の約3倍の面積の土地があり、人口約2000万人が住んでいるという（人口密度は東京の約10倍！）、中国一の大都市です。上海は、1990年代以降に外資導入で毎年10%以上の急激な経済成長率を記録し、中国の大都市としてだけでなく、世界の大都市の1つとなるまでに発展しました（中国国家統計局）。その成長は現在も年8%ほどで続いています（日本経済新聞 2014）。上海経済が外国への高い依存で成立していることに伴い、多様な言語の看板が乱立するような、大変国際色豊かな土地となっています。日本企業の多さも特筆すべき点でしょう。連日報道されているような日中間の軋轢が信じられないほど、あちこちで日本企業の看板を目にしましたし、コンビニエンスストアも日系のものばかりでした（もちろん、我々訪問団に対する偏見も感じられませんでした）。その経済発展を支えて来たのが、交通網の整備です。特に2010年の上海万博を前に、リニアモーターカーに代表される鉄道網をはじめ、各所を結ぶ片側5車線もの高速道路が整備されています。経済成長の様子は、市内各所での膨大な高層住宅の建築工事や、東京都内よりも高いと予想される高級外車率からも容易にうかがうことができました。

教育については、OECDの調査において、2009年、2013年と引き続いて上海の15歳学力が3分野で世界のトップであったことが記憶に新しいと思います。上海市教育委員会のホームページ (<http://www.shmec.gov.cn>) によると、市内の小学校、中学校、高校の合計は約1500校で、生徒数は約130万人にもなります。また、上海は中国の他の都市と比較して、経済発展を牽引する富裕層が多く、教育熱が高いことが際立っています。それをさらに加速させているのが、国の教育基準に加え、上海独自のカリキュラムがあることです。今回の訪問先の小学校、高校、大学において、そ

の独自カリキュラムを数多く聞くことができました。校長の独自裁量も一定まで認められているそうです。印象深かったのは、上海師範大学附属小学校です。校長先生によると、附属小学校は完全に周辺の公立学校と同じように、「学区に住んでいる子ども」が入学対象であり、入学試験は行っていないということでしたが、教育熱心な親は、わざわざ附属小の学区に移り住んで入学資格を満たそうとするとのことでした（その場合、長く住んでいる子を優先するとのこと）。このように、学校ごとの人気の差は存在しますので、附属の子どもを周辺の市立小学校と完全に同一視はできないと感じました。

上海の教育の素晴らしい点の1つは、1980年代にすでに20年後となる2000年までの高度発展を見据えた長期計画を独自に打ち出し、その後も適宜改革を続けていることです。それらのうち、教師教育の改革について一部紹介します。王智新（2011）によると、教師育成については、かつて重点が学歴に置かれていましたが、その後2010年には、「高資質かつハイレベルな校長と教師チームの養成」にシフトしています。具体的には、以下のような改革を行いました。

- 1) 教師の供給源から大きく変更し、多角化ルートを構築
- 2) 教師の継続教育の強化
- 3) テレビ講座などを通して、全市の教師を対象に科学研究の教育訓練を行い、科学研究をもって教育研究と管理を促進
- 4) 中堅教師チームの育成を強化し、小中学校校長の職務ランキングシステムを押し広げて幹部チームの確立を推進

前述のように、上海にはある程度国の方針に加えて独自の教育が認められています。上海の教育は、めまぐるしい社会変化に対し、先を見据えて教育システムを改革していく仕組みが構築されているのです。その筆頭に立つのが、教師教育です。その効果は、実際に学校を訪問した際に、日本よりもはるかに充実したICT機器などを、自在に使用しながらハイレベルな授業を展開する若手教師の姿からも察することができました。特に、文化大革命後に生まれた世代の教師が多くなってからは、教育が劇的に変わっているということを訪問先の高校の校長から聞きました。また、高校の教師は、大学院修了者が多く、留学経験も豊富な人材が多いそうで、教師の専門性の高さや見識の広さが特に強く求められているとのことでした。さらに、上海師範学校の附属小学校の校長や副校長は、30代から50代前半という若さであり、教

育委員会の規定による枠の中にあっても、信念に基づいた独自の改革を行っていることが、心に焼き付きました。特に校長先生の「若いからこそ変えていく力がある」という言葉が印象的でした（実際は英語でした）。

驚いたのは、教師教育において、上海師範大学が福井大学同様の学校拠点方式をすでに実践していることです。上海師範大学教育学院の夏院長と胡副院長によると、大学のスタッフや教育委員会がチームを組んで学校を訪れ、現場で教師の課題解決に取り組んでいるそうです。また、学校のマネージメントについては、福井大学よりも一部進んでいることもありました。例えば、校長のマネージメント研修を大学で定期的に行ったり、複数の校長がチームとなって、それぞれの勤務校を訪れて一緒に課題解決をしたりするそうです。また、校長にも「第一級校長」というようなランク付けがなされ、より高いマネージメント能力や実践能力が常に問われる仕組みになっています。

上海の教師教育は予想より遙かに進んでいました。ただし、教師を取り巻く課題については、日本と同様のももありました。まず、前述の胡副院長によると、職業としての「教師」の人气が落ちているそうです。多忙で大変な仕事の割に給料が高くない、というのがその理由だそうです。また、競争の激しい中国では、子どもへ過度の期待をかけている保護者の対応にも苦労があることも聞きました。優秀な人材が、教師より給料が高い民間企業へと流れてしまうのは、著しい経済発展を遂げる社会にあってはどこでも生じる問題なのかもしれません。

3. ESDの視点から

鶴見陽子(2008)によると、中国では、近年環境教育がESDへと方向付けられ、2003年には『中小高校環境教育特定課題教育大綱』（中小学環境教育專題教育大綱）が發布され、ESDが実質的に国家教育計画に組み込まれています。当然、その理念や課題、方法には中国の社会文化・経済的背景が反映されています。なかでも着目したいのが、ESDの意味付けが「21世紀に見合う人材の育成、持続可能な発展戦略の実施、及び、現代化した強国の建設のため」というものです。「発展」とは何か、という部分に現在の中国の思想が色濃く表れていることが感じられます。国家としてESDを推奨してはいますが、現実には日本同様に大きなギャップがあると思われました。現地で感じた点をいくつか記します。

まず、環境面から考えてみます。在中国日本国大使館のホームページによると（http://www.cn.emb-japan.go.jp/taikiosen2013_j.htm#1）、中国の環境汚染は高い頻度で深刻なレベルに達しており、特にPM2.5では中国国内のみならず、越境して日本にまでその影響が及んでいます。大気汚染に関しては、中国南部にある上海は北部ほどの汚染レベルにはないのですが、それでも現地滞在中は常に大気が煤煙や排気ガスなどで霞んでおり、上海市中心部では、長時間マスクなしで呼

吸していると喉に違和感を感じるほどでした。ただし、オートバイについてはかなりの率で電動化が進んでおり、リヤカーまでバッテリー走行可能に改造されていて驚きました。日本での電動バイクの普及率を遙かに超えています。ゴミの分別や下水処理は、お世辞にも進んでいるとは言い難い状態でした。水路には多数のゴミが流れ、未処理の汚水が流入し、どこもかなりの濁りが見られました。上海市内において本来の自然環境が残っている場所は、一部の保護区をのぞき、もはや極めて少ないというのが私の印象です。

次に教育の視点から報告します。訪問した高校において、校長に大気汚染や学校における環境教育について質問しましたが、自国が大気汚染の発生源になっているという認識は薄く（国内でどの程度汚染源に関する情報が開示されているのかにも疑問があります）、学校における具体的な環境教育のアクションも取っていませんでした。ESDという言葉も浸透していません（これは日本も同様です）。環境教育については、日本同様、いやそれ以上に、経済発展最優先や受験科目への偏重があって、本格的に行われていないのかもしれない。著しい発展のまっただ中において、持続可能性が二の次になってしまうということは、かつて日本も通過してきたという経緯もあって非難はできませんが、中国という広大な国土と人口のもとで生じる環境汚染については、国内レベルでは済まない規模になるため、早急な対策が必要であると思います。

しかし、現地視察を通して、この課題が今後改善される兆しをわずかながら感じ取ることができました。例えば、前述の附属小学校では、環境教育と呼べるカリキュラムやプログラムも存在しました。校長からは、子どもたちが休み時間に、タッチパネルのモニターで、ゲーム感覚でゴミの分別について学んでいることや、校外で地域の方と一緒に美化活動を行っていることを教えていただきました。また、市内の大気汚染度が高い場合は（例：中国環境保護部「全国都市大気質リアルタイム公表プラットフォーム」）、すぐに体育など野外での活動を中止するとのことでした。上海師範大学のキャンパス内についても、ゴミはほとんどなく、環境整備はかなり進んでいました。中国の環境問題の現状に対して、住民の問題意識がないわけではないようですし、政府も今後、本格的に対策を行う予定ですので、中国でも子どもたちの世代は徐々に環境改善にも配慮をするようになると期待しています。

4. おわりに

今回、上海滞在中に、小学校、高校、大学のそれぞれで複数の科目の授業を見せていただく機会をいただきました。各授業は、比較的ハイレベル、かつ「視察者に見せられる授業」が選択されていた可能性もありますが、それらを通じて等しく感じたことは、その「勢い」でした。現在著しい経済成長がなりを潜め、すでに成熟期にあると言われている日本での授業では、あまり感じられ



ないような勢いでした。その授業における勢いについての是非は問いませんが、教師がその高い専門性に基づいて自信を持ってきびきびと授業を進めていく様子と、それに生徒が集中力を保ったままついていく様子が強く印象に残りました。教師も生徒も明確な目標を定めており、そこへのモチベーションが高く維持されているように感じました。それが教育現場において感じた「勢い」となり、さらに現在の上海の発展を担っているのでしょう。しかし、その「1人の教師対生徒全員」、そして、「一方向的」というかつての日本で主流であった授業スタイルの影では、授業に付いていけない子どもたちや、子どもたちの個性に応じた学びなどを支えるための、個々の見取りに不十分な点があるように感じました（あくまで視察させていただいた授業のみからの印象に過ぎませんが）。また、上海師範大学の幹部からは、過度の競争社会における幼年期からの子どものストレス、親の経済格差による子どもの学習機会の差、学びの本質を問う授業の不足、教師による教科を越えた共通性の探究の不足など、様々な課題が生じていることも聞きました。今後、日本同様に、子どもどうしの学び合いや高め合い、授業における教師と生徒の双方向性の確立、教師の協働による学びの本質の追究、そして、さらなる大学など研究機関との連携による教師の質の追求が求められてくるように思います。

最後に、中国と日本を比較して思ったことを記します。日本はあらゆる面で大変親切であると同時に、親切すぎるとも感じました。中国では、電車やバスが発車する時も、飛行機の数時間の遅延の理由も、何も伝えてくれません。その分、自分がしっかりと先を予測して不測

の事態にも順応して行動しなくてはならないことを学びました。私は、この「自分で先を見て行動計画を立てる能力」は、周囲の人が全て準備してしまった状態においては、培われにくいと思っています。その視点で日本の教育現場を見ると、少しこの「準備しすぎ」「先を読みすぎ」の面があるように感じます。良かれと思って教師や保護者が用意したことが、結果として、子どもたちの自主性、個性の多様性、創造性などを萎縮させ、自ら学び、自ら将来を選択する力の勢いを失速させてしまっていないでしょうか。あらためて、あえて「子どもたち自身で学ぶことを大人がじっくり見守る」時間も確保することが重要であると強く思いました。

百聞は一見にしかずということわざを、あらためて実感した中国滞在でした。いくらインターネットが発達して情報が溢れていても、実際に見て聞くことには到底及ばないことを痛感しました。繰り返しになりますが、このような貴重な機会をいただけたことを、心から感謝いたします。

5. 引用

日本経済新聞 (2014) 「上海市、今年の成長率目標7.5%前後」
http://www.nikkei.com/article/DGXNASGM19003_Z10C14A1FF8000/

王智心 (2011) 「上海事例」から見た中国の基礎教育の変遷とその問題点 第55号: 中国の初・中等教育の現状と動向 Science portal China
http://www.spc.jst.go.jp/hottopics/1105elem_sec_education/r1105_wangz.html

鶴見陽子(2008) 「中国の持続可能な発展のための教育 (ESD) の概念における「発展観」の検討」 国立教育政策研究所紀要 第137集

中国国家统计局. 『中国統計年鑑』各年版 中国統計出版社

中国環境保護部. 「全国都市大気質リアルタイム公表プラットフォーム」
<http://113.108.142.147:20035/emcpublish/>

上海市教育委員会ホームページ
<http://www.shmec.gov.cn>

見えないものを見ようとする事：他文化から学ぶ

元福井大学教職大学院 特命助教 山口 真希

上海視察でもっとも印象的であったのは上海師範大学附属小学校の訪問である。よく晴れて気温もかなり上昇した三日目の午前中、上海師範大学から幹線道路沿い

を20分ほど歩いて現地に向かった。ぞろぞろと列を成しながらようやく校門に着くと、道路側に向けられた電光掲示板に熱烈歓迎日本福井大学云々という赤い文字が

目に飛び込んだ。ゲートで守衛さんからゲストホルダーを受け取り、首にぶら下げて中へ入った。玄関入ってすぐ建物の壁面には1年生から5年生まで（全学年）のアート作品が敷き詰められるように飾られていた。私たちが時間をかけて鑑賞している間、その空間には心地よい音楽がかなり大きいボリュームで流れていた。出迎えてくれた若い校長先生が学校中を隅々案内してくださり、美術、数学、体育の授業参観、教育委員会を含めた関係者間の意見交流会を行ったのが主な活動内容であった。訪問者めいめいがカメラを手に持ち記録に励んでいる傍ら、受け入れ側のカメラマンが訪問団を激写するその存在感にもしばしば圧倒された。

教室で行う授業では、子どもたちがとても集中して一生懸命な様子であった。机や椅子は整然と並び、教室のなかにモノ自体が少なかった。子どもたちは一斉に前を向いているので、授業に関係のない装飾や文字は一切目に入らない。日本であればその日の時間割や給食の献立、学級目標といった掲示物が見えるはずだが、先生の机も見当たらず、あるのは無機質なロッカーと黒板の上の鮮やかな国旗ぐらいであった。美術の時間はモデルとなる絵が5枚黒板の中央に貼られ、作業内容が1、2と順番にチョークで記されていた。数学の授業はOHPで先生が手元のプリントを大きく映し出し、上から順番に説明されていた。子どもにとってやるべきことがとても明確であった。授業は教科担任制であり、校長先生は教科の専門性をとても大事にしているということであった。先生が子どもへ語りかける口調、表情から察すると、自律した存在とみなして子どもと関わっているような印象を受けた。また学級担任制じゃないことも相まって、教室が小学校としてはかなりパブリックな空間に感じられた。

若くして抜擢された校長先生はとても熱意のある方で、「子どもの未来を考えたとき、義務教育段階で大事なのはたくさん紙をこなすことよりも芸術科目、アートに焦点を当てることだ」と語っておられた。心が弱い子どもが増えてきていると懸念する校長先生は、子どもの心理的ケア、情操教育を重視しているようだった。日差しをいっぱい浴びた木目調の屋上テラスは花壇や木製ブランコが置いてあり、この小学校の「カウンセリングルーム」であった。心理的な悩みを抱えた子どもの話を聴くには、解放的で明るい空間が適しているという考えなのだろう。私のなかで中国の学校、教育に抱いていたイメージが少しずつ崩れていった。

大学附属というシステムも日本とは違い一般の公立とほぼ同じであるそうだが、やはり重点校であることには変わりなく注目されており、子どもが1年生に上がる

2年以上前に近隣に引越しをしてくる家族もあるという。しかし、入学希望が多く定員オーバーになっても選抜入試はしないとのこと。上海市内に親戚筋があるかどうか移住してきた年数がどれくらいかという基準で入学者を線引きする。「あくまで学校は子どもや親を選べない」「親の経済ステータスに左右されずどの子どもの未来も同じように保障する、教育は公平であるべき」という校長先生のことばが耳に残っている。

中国には「子どもはいつも正しい」という意味のことわざがあるそうだ。子どもはタブラ・ラサで生まれてくるので、不登校など問題が生じたらそれはすべて大人（教育者や親）のミスだというのがトップリーダーの最後の主張であった。心理的ケアの必要な子どもは成績上位層に多く、教室における先生のミスに気づいてしまう。その指摘を素直に受け入れ、子どもと気持ちの交流をして欲しいというのが先生たちに対する最近の願いだそうだ。「教科担任制で担当児童数が多く、とても個別教育はできない」「異教科のコラボレーションは魅力だがまだうちの学校は同教科で精一杯。レベルが高い」現状を踏まえながらも既存のスタイルにとらわれない柔軟性を感じるリーダーの話しぶりであった。

他文化に接触したとき、私たちはついつい自文化の価値観で相手の集団を判断したり、こちらのフレームを勝手に押し付けたりしてしまう。私たちは自分の文化を軸にしながらいちと違いかどうかというセンサーが働くようにも思う。自文化に馴染んだ直線的な発達（発展）のイメージを持っていて、それより進んでいるとか遅れているとかいう判断がつきまとう。しかし、よくよく相手側の話を聴くと、そこでの文化的枠組みや目標は必ずしも自文化のそれと一致しない。異なるコミュニティの話（現状、伝統）を聴いていると、自文化の価値観が問われる思いをし、では一体望ましい発達（発展）とはどういうものか分からなくなる。しかし自分の目でしっかりと観察をし、そこで生きる人々の活動がどういうシステムのなかで繰り広げられているのか、どうつじつまが合っているのかを知ろうとすることが自分の思考を活性化させてくれる。自民族中心主義に陥らないように努力することが自分の学びにつながるという感覚を強く抱いた訪問であった。



Staff 紹介



森田 史生

Fumio Morita (附属中学校)

今年度、大学院教育学研究科准教授として附属中学校よりスタッフの仲間入りをさせていただきました。福井大学「三位一体教育改革」の一つとして、学校現場で実際に子どもたちに授業を行いながら、教職大学院のスタッフとして授業改革、教師教育の研究に携わっていく「研究実践者教員」としてお世話になります。この「研究実践者教員」という立場は全国でも初めての試みとのことで、学校現場での授業実践をもとに、実際の子どもの実態を踏まえながら研究に取り組める利点があると感じています。学校現場で実践を行い、その実践のプロセスを学部生や院生、現職の先生方と共有しながら、省察を行っていくという「実践－省察－理論化」のサイクルをもとに、省察的实践を進め、実践と理論の往還を具現化できるように研究に取り組んでいきたいと思っています。

教職経験も20年を超え、小学校、行政、社会教育、中学校、在外日本人学校（インド ムンバイ）と多様な職場で経験をさせていただき、現在の附属中学校で勤務してきました。附属中学校勤務も6年目に入り、研究主任として3年目になりました。附属中は長年「探究するコミュニティ」に取り組んでいます。今期は「学びをつ

なぐ《探究するコミュニティ》」を研究主題として、2年次の取り組みをしています。1年次は「省察を捉え直し、次なる学びに生かす」として「省察」の過程を捉え直し、子どもにとっても教師にとっても価値ある「省察」は何かを考えてきました。今年度は、「協働の学びの場を問い直し、学びの繰り上がりを生み出す」として「コミュニティ」における学びの質に焦点を当てて授業実践に取り組んでいます。6月6日(金)に全国にむけて附属中の取り組みを公開する教育研究集会を開催するので、4月からの2ヶ月はその準備に向けて、授業実践をもとに理論の構築を進めています。今は、単元の学びをどうしていけばいいのか、毎日の授業に奮闘しています。附属中学校は、「子どもたちを育てる授業実践」と、教師の協働研究による「学び続ける教師」の集団づくりの両輪で学校づくりをしています。教師が変わるためにはどうすればいいのか、授業を変革するためには何を考えていけばいいのか。授業を基盤にしてクラス、そして学校が変わるために、教師の授業観を変革するお手伝いができればいいと考えています。よろしくお願ひします。



西村 美貴穂

Mikiho Nishimura (附属小学校)

今年度、大学院教育学研究科准教授としてお世話になることになりました。よろしくお願ひいたします。とは申しませんが、普段は附属小学校に勤務しています。今年度から教職大学院の機能を強化する方策の一つとして、「研究実践者教員」が附属学校の教員から4人、配置されました。現場での実践をもとに、教育実習生やインターンを指導していくことが主な仕事です。不安はありますが、精一杯努めていきたいと思っています。

自己紹介ということで、自分自身のこれまでも簡単に

振り返ってみたいと思います。スタートは今立町（現在の越前市）の南中山小学校。豊かな自然と温かい地域の人たちの中で、のびのびと実践できた4年間でした。福井市に入り、社南小学校で7年、附属小学校で7年、円山小学校で5年間勤務しました。

この間、自分を成長させることにつながったのは、一つは研究主任を務めたことでしょうか。校内で研究という柱のもと、先生方を束ね、実践を積み重ねていくのは、決してスムーズにいくものではなく、時間がかかり、悩み、苦勞した印象の方が強いです。しかし、こうした経験があるからこそ、今に活かせることが多くある

など実感しています。

二つ目は、事務局を務めたことです。まだ若い20代後半に、視聴覚の事務局をやらせていただきました。文書の発送や大会の準備などで忙しい思いをしましたが、他校の多くの先生方と一緒に仕事をさせていただく中で、学ぶことが多くありました。特に、社会科のビデオ教材を市内の先生方と一緒に制作したことは良い経験となりました。取材、シナリオ作り、交渉、撮影、編集などを通して、先生方、地域の方、行政の方など、様々な立場の人たちと関わり合いながら、教材を制作していく過程は、今、よく言われる「協働」そのものであったと振り返っています。

三つ目は、県教育研究所に5年間勤務したことです。この5年間は、私にとって大きなターニングポイントとなりました。それは、初めての行政機関勤務だからというだけではなく、携わった仕事のおかげで、たくさんのことを学んだ、または学び直せたと考えています。そのはじまりは、研究所勤務の2年目に教職大学院に入るようになったことでした。しかも、スクールリーダーとして学んでおられる先生方と同様に、私も、この場で学びながら、研究所内の協働体制を構築していく推進役を担うことになったのです。所員が協働して学び合うことによって、所内各課の風通しを良くし、研修機関としての機能や、研修スタッフとしての力量を高めていくことが、私にとっての課題でした。教職大学院では、教員が高度専門職と言われる背景、「学び」ということの意味、省察しながら実践することの大切さなどについて、自ら実践したり、先生方と語り合ったり、本を読んだりしながら学んでいきました。同時に、研究所内では、言

わば校内研修を行うように、月1回ほどの頻度で所員が学び合う場を企画・運営していきました。忙しい勤務の中で、これまでにない新たな取り組みを実施していくには、所員の意識が高まり、その意義を理解してもらうことが必要でした。取り組み内容や運営方法などについて、教職大学院の先生方や、所内の先生方と何度も協議を重ねました。おかげで、所員が研修スタッフとして協働しながら、研修講座を改善することにつながっていったのではと考えています。

研究所では、初任者研修や10年経験者研修、ミドルリーダーの研修などにも携わりました。その中で、子どもが学ぶとはどういうことか、そのための授業づくりで大事なことはどんなことか、学び合う教師集団となっていくにはどうするか、などについて考える機会が多くありました。同時に、これまでの自分の実践や経験を新たな視点で見つめ直すとともに、新しい問題意識をもつことにもなりました。

知識基盤社会の中で、正解のない課題について、協働して解決していく力は、教師自身にも求められています。しかし、その重要性や必要性を感じながらも、毎日の業務に追われ、なかなか学び直しの機会をもてないのが現状ではないでしょうか。現場の課題をどう捉えて、どのように意図的に改善を図っていくか、実践しながら考えてみたいと思います。今年度は、勤務校の研究部に所属しながら、学び合える教師集団に向けて取り組んでいきます。学生や現場の先生方と実践を語り合えることを楽しみにしています。



青木 美恵

Mie Aoki (附属小学校)

今年度、大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)准教授として着任した青木美恵です。私は、附属小学校を兼務しながら教職大学院に籍をおく「研究実践者教員」の一人です。どうぞよろしくお願いいたします。

この「研究実践者教員」としての使命は、実践と理論の往還をいかに具現化していくのかということです。この与えられた使命をどのように果たしていくべきなのかと、正直なところ戸惑いながら、この春を迎えました。

私は、大学教員でもありますが、附属小学校の教員です。今年度は、5年生の担任をすることになりました。久しぶりの高学年の担当で少し緊張しています。心と体も大きく成長し、自己を確立し始める時期の子どもたちとどう向き合っていくのかとドキドキ、ワクワクし

ています。また、研究主任を任せられ、研究をどのようにデザインしていくかと考えを巡らす毎日です。本校の新しい研究テーマ「聴き合い、つながり合って、学びを深める授業をつくる」を先生方といかに共有し、協働を生み出していくことが、学び合うコミュニティづくりにつながっていくのかと・・・。

一方、附属小学校の春は、白い可憐なスモモの花が満開の時期にスタートしました。そして、入学式や始業式は咲きほころソメイヨシノの中で行われました。その後も、リンゴ、ドウダンツツジ、ミツバアケビ、ヤエザクラ、フジ・・・と次々と花を咲かせる木々。「花が終わったかと思ったら、もうスモモの実がついてるよ。」「フジの花かんざし、きれいでしょ。」「ドウダンツツジは、ホントに、満天の星だね。」と話す子どもたちと共に、附属の春を楽しむことができました。小嵐、大嵐が吹いている私の気持ちとは裏腹に、たいへん穏やか

で、順調なこの春でした。

私が、この附属小学校で春を迎えるのは、今年で4回目です。ようやく附属の季節の移り変わりを附属に生きる生き物の姿を通してつかむことができるようになりました。私は、2年前の春、教職大学院で学ぶ機会を得ました。「子どもと共に成長し、学び続ける教師でありたい。」この思いは、教師として生きてきた17年間、ずっと持ち続けている私の信念です。

この信念のもと入学した教職大学院での学びは、「自分を語り、自分を開く」ことから始まりました。語っている自分の思いというのは、「自分のありよう」です。自分の「今」を明らかにし、自分自身を開き、新たな自分をつくり出そうとしているのです。もう1つの学びは、「自分の今を見つめる」ことでした。自分がやってきたことを振り返ったり、過去の記録を読み直したりしながら、自分がやってきたことをとらえ直し、自分の行為に「今」という視点からの意味づけを行うことでした。さらなる学びは、「自分をつくる」こと。自分をつくることは、時間がかかります。時間がかかるし、終わりはありません。しかし、それは、瞬間、瞬間でつくっていくのです。自分の考えは、瞬間の「ひらめき」でつくっていることが多い、と同時に、その「ひらめき」は、過去の自分の積み重ねと新たな刺激によりつくられています。

そして、これらの「学び」には、他者の存在が大きくかかわっています。他者とは、子どもたち、同僚の先生方、教職大学院で出会った先生方ですが、中でもこの教職大学院での学びに大きくかかわっていたのは、イン

ターンシップで私のクラスに入った院生の存在でした。この院生が問いかけてくること、学びとったことなどを記録や研究会、雑談などの中で私に投げかけてくるのですが、その瞬間が、私の「学びを深める」瞬間でした。教師をめざす若い世代の方に、この1年、私は育ててもらったのです。若い世代を育てる使命があると思っていましたが、実は、自分自身が育てられたことを実感できた1年でした。

もちろん、若い世代と関わっていくことにはたいへんなこともあります。しかし、それ以上に得られるものも多いという実感をまわりの先生方にも伝えながら、教育実習やインターンシップに携わっていくことができたらと考えます。そして、先生方だけでなく、実習生や院生とともに、これからの教育について、教員養成のあり方について一緒に探っていくことができたらと思います。

教師の同僚性、教師の協働など教師が学び合う集団をつくるのが重要視されていますが、結局は人との関わりです。その関わりが自分の学び、つまり成長にどう生かされているのかを自分自身が実感できることが大事なのではないでしょうか。それには、そこに意味や価値を見つけて生きていくことが必要なのです。

思い悩んでいる私の話に耳を傾けてくださる先生方、授業づくりに知恵をかしてくださる先生方、自分を開き、新たな自分づくりに力をかしてくださる先生方が附属小学校にも、教職大学院にも存在することに心から感謝して、一歩ずつ前に進んでいきたいです。



天方 和也

Kazuya Amakata (附属特別支援学校)

今年度、実践と理論の往還を旨とする「研究者実践教員」として、教職大学院に籍を置き、附属特別支援学校教諭を兼ねることになりました天方和也

です。私は、附属特別支援学校創立に携わった方々が掲げた「自由で民主的で活気に溢れ、生き生きとやりたいことができる学校を作ろう」という理念に共感し、またその下で培われてきた校風や伝統の中で生き生きと活動する子どもたちに惹かれて長年本校に勤務してきました。その間、子どもたちの個性や長所を大切にしながら生活に根ざしたもの作りや体験活動を実践しようと心懸けてきました。

その出発点となったのは子どもたちが、がんど鋸を手に丸太を切る授業でした。鋸を手に生き生きと取り組む様子は、机上での数や言葉の学習に限界を示していた子どもたちとは別人のように見える程でした。そして「子どもたちの生活の拠点を作ろう」という合い言葉の下、先輩の先生方に教えてもらいながら子どもと一緒に中学部前

庭に竪穴式風の小屋を作りました。その後も以下のような実践を行ってきました。在来工法の小屋やミニログハウスを作る。レンガを積んでピザ窯を作り、粉から生地を練りトッピングしたピザをその窯で焼く。大学の農場で種を蒔いて栽培し製粉したそば粉を使ってそばを打つ。石膏型や機械ろくろ、電動ろくろなどの様々な道具を使って陶芸作品を作る。学校の庭に芝を張る。グラウンドや庭の芝刈りを定期的に行う、等々です。子どもたちは、このような活動に嬉々として取り組む過程で道具の使い方や人とのコミュニケーション、作業に対する見通しなど様々なことを獲得していきます。また長期間にわたり活動に従事した結果、形あるものが完成する、あるいは一定の成果が上がることを経験すると、必ず成就感や達成感を感じます。さらに、このことが他の活動に対しての意欲・動機につながり大きく成長したという子どもの事例を数多く見てきました。

上記の実践の一部は、本校編著の『ゆっくりじっくりスローライフ教育ー生活・手づくり・協同の12年で育つー』に記されています。このタイトルにある「スローラ

イフ」は福井大学の特色ある取組の一つとして挙げられているE S D (Education for Sustainable Development) と共通性を有する概念であり、両者は今後のインクルーシブ教育においても重要な役割を果たすと考えられます。なぜならばインクルーシブ教育の根底には、科学技術万能主義・経済効率至上主義の価値観に基づいて構築されている現代社会は、環境問題や南北間格差に象徴されるような限界と欠陥を内在しているという認識に立ち、前記の価値観によってメインストリームから取り残されてきた子どもを含めた全ての子どものための教育、ひいては社会を再構築しようとするパラダイムの変換が存在しているからです。

このような実践と理論を教職大学院で他のスタッフと協働・省察することにより深めたいと思っています。

次に大学と附属学校の関わりについて述べます。私が本校の研究主任をしていた時に、福井大学の先生方から研究に関する助言やアドバイスをたくさんいただきました。具体的には、レイヴ＝ウェンガーの「正統的周辺参加論」という本質的な教育方法論(一般的な机上学習に対する、共同体に参加・実践することにより知識や技能などを

身に付ける学習方法(徒弟制が一例)など人間の学びには様々な形があるという論)や、I C F (国際生活機能分類)というWHOで採択された障害に関する当時の最先端の国際的な知見(それまでの、障害の見方をマイナス面からの観点による、機能障害→能力障害→社会的不利という一方向の医学モデルから、活動・参加・環境因子などのプラス面の要素から生活機能を分類し、相互に作用するという社会モデルに転換、且つ全ての人に対する分類と定義)などの大きな意義をもつ事柄から、教育における縦割り集団の持つ意味や事例研究等々、教育現場の実践に有用な事柄に至るまで、多くの指針や示唆を得ることができたことです。今後はこれらのことをより日常的なものにしていくこと、すなわち教職大学院のスタッフとの協働により、今後の特別支援学校の在り方、研究実践等に関する知見を私なりに理解し現場に伝える一方、現場の実態や要望を大学側に伝えるという双方向のやりとりを日常的に遂行することを通して、大学院と附属特別支援学校との連携を密に図れるようにしていくことが私の役割だと思っています。

院 生 紹 介



上島 雅恵 うえじま まさえ (鯖江市豊小学校)

この4月にスクールリーダー養成コースに入学した上島雅恵です。現任校の鯖江市豊小学校に勤務して6年目になります。美浜南小学校で新採用となり、三国中学校に2年、中央中学校で9年の中学校勤務を経て、前任校の神明小学校に6年間お世話になりました。専門教科は、国語科です。

これまでの自分を振り返ってみると、生徒指導に教科指導、学級経営に、保護者への対応等と、体当たりで「元氣さ」を売りに精一杯取り組んできました。しかし、「今の自分に何ができる？それは、自己満足ではないの？」と自問自答すると何も答えられない自分がいました。中堅教員として、自分に与えられた業務だけではなく、学校組織全体を視野に入れながら、自分の在り方を考えていただろうか。忙しさにまかせて、現状維持に陥っている自分に、「学ぶ教師」としての自己改革を自らに課すために、教職大学院への入学を希望しました。

中学校、小学校と全学年の担任を経験し、学習内容の系統性に関する問題点を感じています。国語科を中心として、小学校での学びを確かなものにし、中学校の学びへとつなげていけるような授業研究をしていきたいと思っています。

います。また、本年度は、研究主任を任され、「主体的に学ぶ子どもの育成」という研究テーマにユニバーサルデザインの視点を取り入れながら、研究を進めています。前任校での研究主任では、自分が邁進することに力が入ってしまい、自分の未熟さゆえ、教員同士がつながり「バクトルを一つに」というわけにはいかず、中途半端な形で終わりました。その反省を生かし、「開かれた授業」「学校全体で子どもを育てていく授業作り」を目指して、教員が研究を楽しんでいけるような「組織づくり」も学んでいきたいと思っています。

4月の合同カンファレンスでは、異校種や他地域の先生方と交流し、「語りと傾聴によるコミュニティ」を体験することができました。教職大学院の一員としての所属感を得、これからの2年間がとても楽しみになっています。

自分のこれまでやってきたことを離れたところから見て、何を求めて実践してきたのか、じっくり振り返り、整理し、そして、これからの取り組みを探っていく2年間にしていきたいと思っています。これまでの積み重ねを大切にす一方、古い考えや思い込みにとらわれず、教員として成長できるよう努力したいと思っています。どうぞよろしくお願ひします。



墨谷 宰

すみや つかさ (啓新高等学校)

本年度より福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースでお世話になることになりました墨谷宰(すみやつかさ)と申します。出身は福井県のあわら

市で、旧芦原町の最北に位置する北潟という小さな集落で生まれ育ちました。地元には「墨谷」という姓は比較的多くありますが、「宰(つかさ)」という名前はこれまで34年間で1人しか出会ったことがありません。字の持つ意味からしますと、今は完全に名前負けしている私ですが、今後さらなる精進を重ね、早く名前に見合う人間になりたいと考えております。

現在は啓新高等学校に勤務し、福祉を学ぶコースを担当しています。今年度よりスタートした新しいコースで、男子3名女子35名という特異な男女比のクラスを受け持つこととなりました。これまでの経験を生かしながらも、心機一転がんばろうと意気込んでいますが、毎日が手探り状態です。それでも「あらゆる可能性に挑戦する心」を持った主体的な生徒を育てることを目標に奔走しています。

本校は、昭和2年創立の福井精華学園を母体とする私立高校です。平成24年度には学園創立85年、高等学校創立50年、また前身の福井女子高等学校から啓新高

等学校となって15年というメモリアルな節目の年を迎えました。来たる学園創立100周年に向け、「現状維持は後退」を合い言葉に日々さらなる改革に取り組んでいます。本校は建学の精神である「真・善・美」「行学一路」に基づき、個の完成を目指す教育をしています。そして学校スローガンに「可能性への挑戦」を掲げ、教員一同日々教育活動に邁進しております。また、本校は平成16年に福井大学との連携協定を結び、翌年4月より学校長自らが教職大学院の前身である福井大学大学院教育学研究科学校改革実践研究コースに入学したのを機に、校内に学校改革研究チームが発足しました。その後教職大学院の拠点校となり、平成21年度より毎年1人ずつ本校教員が院生となり学ばせて頂いております。当時研究チームのメンバーであった私は、いつか自己研鑽のために教職大学院で学びたいと考えておりましたので、この度の入学は本当に嬉しく、このチャンスを与えて下さったすべての方に感謝しております。

私は今年度で教員11年目を迎えました。無我夢中で走り抜いたこの10年で得たさまざまな経験を糧に、新たなスタートの年を教職大学院でがんばっていきたくと考えております。自分のため、学校のため、そして何より生徒のために努力して参りますので、ご指導の程よろしくお願いいたします。



大村 正一

おおむら しょういち (明倫中学校)

今年度、スクールリーダー養成コースに入学しました大村正一です。現在、福井市明倫中学校に勤務しています。今年度で本校に勤務して6年目になります。本校は、生徒数712名、

教職員48名の大規模校です。各学年8クラス(＋特学2)の構成で、教職員は、経験ある年配の先生方からエネルギーな若手の先生とバランスよく配置されています。「チーム明倫」を合い言葉に、教科指導や学級指導等では、互いにアドバイスしあったり、相談しあったりできる教員間のよい雰囲気が感じられ、「活気ある明倫」を目指し、それぞれの立場で日々の教育活動に当たっています。そんな職場の中で、私はたくさんの先生方に支えられながら自分に与えられた仕事を精一杯取り組んできたつもりです。しかし、40歳になる今、支えられるだけでなく、周りの先生方や学校全体を支えている立場にあることを強く感じるようになりました。そう思っている矢先、前校長先生から教職大学院の話の伺いました。突然のことで戸惑いや不安がありましたが、何か新しいことにチャレンジする良い機会と受け止め、教職大学院の受験を決意しました。

教職大学院では、合同カンファレンスやラウンドテーブル等で、様々な校種、様々な立場の方々とお話を

したり議論したりすると聞きました。それらの活動を通して、自分の視野を広げるとともに、教員として自分が今後目指していくべき方向性を考えたいと思います。そのためにはまず、これまでの自分自身の歩みをじっくり振り返り、教員として何を目指してきたのか、原点に立ち戻って考えたいと思います。そして、先輩の先生方の歩みや実践報告をお聞きする中で、自分の進むべき道を見つけていこうと思います。

今年度、研究部の副部長という役割をいただきました。本校の研究がより効果的に進められ、活性化されるように、他校の取り組みや先進校の研究成果を分析し、それを本校に還元していくことも課題です。本校の研究のねらいは、「表現力・コミュニケーション力の育成」です。その達成に向けて効果的な教育活動実践を学ぶことはもちろんですが、一学校の研究組織が、全教員同じベクトルをもって運営されるためにはどのような環境づくりや手立てが必要なのかも学んでいきたいと思いません。前述のように本校の良き教員間を、次はどのようにコーディネートしていき、「学び高め合うコミュニティ」を作っていくかが私のこの2年間の役目であるとも考えます。そのような意味でも中間職としての自身の「コミュニケーション力」も身につけていきたいと考えます。2年間、どうぞよろしく申し上げます。



小林 英典 こばやし ひでのり (岡本小学校)

こんにちは。スクールリーダーコースに入学しました小林英典と申します。現在、越前市岡本小学校に勤務しておりますが、教員生活も27年目に突入し40代最後の年となってしまいました。採用は、丸岡町高椋小学校からスタートし、その後、小学校13年、中学校7年、行政6年と色々な仕事を体験することができ、非常に良かったと思っております。特に行政では生涯スポーツの担当として、総合型スポーツクラブの設立のため地元の方々とスクラムを組み、スポーツに対するニーズの掘り起こし、キーパーソンへの働きかけ、クラブを作りたいという雰囲気作りと、まさしく「協働」ともいえる仕事をさせていただきました。学校現場に戻ってからも自分のできることを精一杯やってきましたが、教職大学院への入学のお誘いをいただき、自分の視野がさらに広がるきっかけになるのではないかと考えるようになりました。

4月19～20日に合同カンファレンスに参加しましたが、そこで感じたことが二つあります。一つ目は、自分が非常に小さな世界で仕事をしてきたこと、しかも、その小さな世界の中で自分が自信满满になっていたことに気付いたことです。今まで、高校や大学の先生方と話をさせていただく機会は全くありませんでしたの

で、考え方の違いや仕事に対する思いなど、すべての話の内容が自分にとっては新鮮でした。今の仕事場で通用しても他ではどうだろうかという思いや、ぜひ真似てみたいと思うような実践を聞かせていただき、自分の幅をほんの少し広げることができた気がしました。自分の話でも、相手の方が同様な考えを持っていただけるとありがたいです。二つ目は、大学院を卒業された先輩方の長期実践報告を読み、生徒に対してどこまで教えると良いのかということを考えるようになったことです。分かる授業がしたい、生徒の力を伸ばしたいという情熱は常に持っていました。自分の持っている知識をすべて教え込み、その結果できるようになった生徒を見て満足していた自分がいたように思います。課題解決学習においても、こちらが生徒を誘導し自分で解決できたような錯覚をさせていただけで、本当の探究活動はあまりさせてこなかったのではないかと、結果ばかりにこだわり、生徒の本当に伸ばさなければならない能力を軽視してきたのではないかと反省点ばかり思いつくようになりました。二年間の研修で、自分なりの答えを見つけたいと考えています。

入学して早々、皆さんについて行けるか不安になっていますが、大学の先生方のご支援をいただきながら楽しみたいと思っています。どうぞよろしくお願いたします。



砂原 亘 すなはら わたる (青郷小学校)

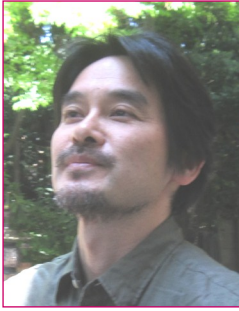
今年度、福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました砂原亘です。初任者として高浜町に赴任して今年で20年目を迎え、講師を含めるといつの間にか20年以上が経過していました。その間、児童1名の担任から41名までの担任を経験させていただき、様々な子どもたちとの出会いを重ねてきました。現在は若狭富士と呼ばれる青葉山の麓にある高浜町立青郷小学校に勤務し、3年目となります。元気で素直な子どもたちと毎日楽しく過ごしていますが、ミドルリーダーと呼ばれる年になり、皆さんもそうだと思いますが、校務分掌上で学校全体を動かす役割を任せられることが多くなり、教材研究の時間も確保しにくい日々が続いています。

そんな中、昨年、教職大学院を受験してみないかと当時の校長先生にお誘いを受け、正直言ってこれ以上忙しくなるのは…と思う自分と、ともすると子どもたちと接することに慣れてしまい、これでいいのかと思う自分との間でどうすべきか悩みました。しかし、教員生活も20年を過ぎ、そんな自分を打破したいとの思いと、大学院を出られた先輩教員からの「大学院はあたたかいよ。充実した気分現場に戻れるよ。」とのお言葉を思

い出したことで、大学院で学び、自分を高めることを決めました。

その先輩と話をしていると、「協働」「子どもの見取り」「省察」「コミュニティ」といった言葉を耳にします。自分は先生方と「協働」できているのか、子どもの「見取り」ができているのか、授業の「省察」がなされているのか、「コミュニティ」とは一体何なのかといったことを、大学院へ入学した今、ことさらに考えるようになりました。しかし、4月19日に行われた第1回のカンファレンスで、「『協働』とは周りの先生たちと同じ時間軸で一緒になって『生み出す』ことで、コラボレーションである。合わせるのではなく、いつの間にか練り上げられたビジョンである。」とのお話をいただき、今まで自分が行ってきた教育活動にもしっかりと「協働」がなされていたと、目からうろこが落ちた思いがしました。そして、その後様々な先生方とお話をさせていただく中で、確かに「あたたかく」なって帰路に就くことができました。

まだまだ始まったばかりの大学院での学びですが、先輩方の実践を読ませていただいたり大学院で席を同じくする仲間と語り合ったりしながら実践を積み、学んでいきたいと思っています。そして、そうやって深められたことを子どもたち、また現場の先生方に還元することができたらと思っています。皆様、どうぞよろしくお願いたします。



金子 奨

かねこ すすむ (新座高等学校)

はじめまして。今年度からスクールリーダーコースでお世話になる埼玉県立新座高校の金子奨です。

10年ほど前、協働的な学びを核にした学校改革がすすめられている教室に通ううちに、ふと気づいたこと。なぜ、〈か〉ではじまる動きがこの学校の子どもたちには多いのだろうか？

ある子が〈かたり〉、ほかの子がそれを〈かたどり〉ながら〈かながえ〉、それらが〈かく〉ことによって表現される。ことばが静かに〈かわされ〉、〈からだ〉はやわらかく幾重にも〈かさなり〉あいつつも、子どもたちの〈かたち〉がくっきりと現れてくる。そして、こどもたちの表情が〈かがやき〉はじめる。

新座高校で学校改革に取り組みはじめて、それは教職員にも共通している、ということに思い至りました。教師の身体から強張りがとれ、大きな声が聞こえなくなり、ことば遣いがていねいになってくる。職員室は落ち

着いた雰囲気醸すようになって、居心地がいい。

ぼくが教職大学院で考えを深めたいと思うのは、こうした変様がいかなるしくみのもとで、どのような力が働くことによってもたらされるのか、そして改革を継続させるために必要なことは何か、ということです。

それは教育学とその関連諸学のみならず、哲学、政治学、社会学、歴史学、文化人類学、精神分析学、言語学等々の知見を参照しなければ解き明かすことのできないものだろうとは思いますが。しかし、それ以上に、多様なひとたちとの出遭いなしにはなしえないことでしょう。

さまざまなひととのたまさかの出遭いを懐に手繰り寄せ、複数の声を付けあいつつ反響させる連歌のように、教職大学院を一たとえ異界を覗くことになろうとも—そこにつどうひとたちとの共同／協働の場としていくために、できうる限りのことをしてみたい、と思います。

ちなみに、新座高校では、年7回の公開授業研究会をひらいています。ぜひ、お越しいただき、アドバイス等をいただくことができればありがたいです。

2年間ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

◆◆ 研究紀要・実践報告書の紹介 ◆◆



平成25年度ミドルステップアップ研修 実践記録集

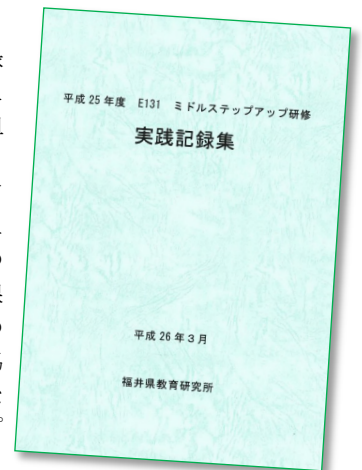
福井県教育研究所 (平成26年3月)

平成24年度、福井県教育研究所のミドルステップアップ研修は、「個々のリーダーの知識・技能習得」から「リーダー研修を通じた学校全体の教育力向上」への転換を眼目として大幅にリニューアルされた。具体的には、①実践と省察のサイクルを積み重ねる年間を通じた研修プログラム、②学校改善を目指した所属校での実践そのものを研修プログラムの要とする、③研究所所員が学校を訪問する要請研修の活用、そして、④企画・運営・講師等での福井大学教職大学院との連携を特徴としている。

本研修の流れを辿ると、まず複数回の集合研修への参加からプログラムは始まる。教職大学院スタッフを講師とした講義での問題提起やその後のグループ協議を通じて、受講者は所属校の現状をじっくりと省察し、ミドルリーダーとしての自身の課題、学校改善に向けた所属校の課題を探っていく。そのような課題の捉え直し、そして、所属校の日々の実践と並行して、夏には課題解決に向けた方策の共有を図る集合演習に取り組む。その後、研究所所員が所属校を訪問する要請研修を活用しながら、学校改善に向けた試みを具体化し、その成果と課題を冬のグループ協議(福井大学教職大学院スタッフ及びリーダー院生とのクロスセッション)や実践記録の作成を通じて表現し、省察を深めていく。

平成25年度の実践記録集には、本研修を受講した31名の所属校の取り組み、そして、それを支える本研修での学びが描かれている。いずれの実践記録にも明確に表現されているのは、学校改善に向けた「課題」とは何かという問いの重み、そして、教員の「協働」に向けられた実践的な眼差しである。学校改善プロジェクトの展開や停滞、校内・外の研修での省察、そして、教員集団における多様な声・視点・解釈に支えられながら探られていくのは、即時的な課題解決の方策ではなく、課題自体の複雑さや奥行きである。

画一化でもなく、分散化でもない、教員集団の多様性を力とする「協働」とは何か。実践課題に向き合うプロジェクトの持続性を支えるものは何であるのか。ミドルリーダーへのステップとなる問いをひらく実践記録集として、一読を薦めたい。(杉山晋平)



インターンシップ／週間カンファレンス報告

教職専門性開発コース2年／中藤小学校 天谷 美伶

毎週木曜日、ストレートの院生が大学に集まり、カンファレンスが行われます。内容は「今週の学びの振り返り」、「主担当企画」、「公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習」、「授業改革・カリキュラムマネジメント実践事例研究」の4つで、朝から夕方まで目一杯頭を使います。

「今週の学びの振り返り」では、一週間のインターンシップでの経験を中心に振り返り、悩みや思いなどを共有し、経験を意味付け、価値付けていきます。それぞれのインターンシップでの経験を語り合っていくことで、自分のインターンシップ校以外の拠点校の様子を知ることができます。中藤小学校でインターンシップをさせていただいている私にとって、他の小学校の様子を知ることができるだけでなく、中学や高校の子どもの姿を知ることができる大切な時間になっています。今私が関わっている小学生たちが中学高校でどう過ごすのか、小学校で身につけるべきことや経験すべきこと、小学校教育の役割とは何か、具体的な子どもの姿を語り合いながら考えることができます。また、学校種は関係なく共通して語ることができる部分や、異校種異教科だからこそ気付けることが多くあり、学校種や専門教科を超え、教育を専門とする者として語り合うことの大切さを実感しています。

今月は年度始めということで、新しい環境での子どもたちや自分の様子を語る院生が多かったと思います。教職大学院生としての生活がスタートしたばかりのM1の話を知っていると、中藤小学校を知ろうとすること、子どもを知ろうとすることで精一杯だった去年の今頃が思い出されました。去年の私と比べ、より広い視野で自分の経験を振り返る先輩たちの姿から、自分の学び方を反省させられることもあります。また、「教師として、どれくらい子どもと距離をとるべきなのか」、「こんな場面があったが、子どもの自主性を育てなければと考えると、注意したり介入したりしてもいいのか迷ってしまい動けなかった」といった悩みを聞いて、去年は自分も同じように考えていたはずなのに、いつの間にか自分なりの答えを見つけて悩まなくなっていたこと、もしくは考えなくなってしまうことに気付かされます。今月の「今週の学びの振り返り」はM2にとって、悩みや思いなどを共有し意味付け価値付けするだけでなく、M1の姿から自己を振り返る時間になったのではないかと思います。

「主担当企画」は、担当になった院生たちが企画した活動に取り組む時間です。主担当は一か月で交代します。どんなテーマを設定し企画するかで、この約一時間半の密度が決まります。今、院生たちが考え取り組むべきことは何か、そのために全4回、あるいは3回でどんな活動をするかを考えます。授業を考える時と同じような過程を経て企画されていきますが、指導要領のようなものは無く、どんな企画をしてもいいため、自由度が高

い分とても難しく感じます。今求められている教員の資質とは何かを知ることが、主担当企画を決めていくための指針になるのだと思います。今月の主担当である附属小中学校の院生が設定したテーマは「Re:START(リスタートダッシュ)」というもので、今年度の教職大学院での学びの「柱」を作っていました。自己マトリックスを作成して、自分のこれまでの歩みを捉え直し、今年度のインターンシップで何を学んでいきたいのか、どんな実践を行っていきたいのかなど、それぞれ自分の「柱」となるものを明確にすることができました。自分ひとりで目標を設定するのではなく、それを語り合うことで、自分だけでは見えない新たな視点を取り込んだ、より強固な「柱」ができていったのではないかと思います。

午後からの「公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習」と「授業改革・カリキュラムマネジメント実践事例研究」では、インター先の学校の紀要を読み解く、自分の専門教科の実践記録を読むなどし、レポートにまとめたものを持ち寄って語り合いました。私は中藤小学校の実践の記録、中藤小学校での体育の実践記録、その実践をされた先生が過去に他の小学校でされた実践の記録を読みました。違う学校で、同じ学年で、同じ単元の実践をされた先生の記録を読み、先生の実践が中藤小学校の研究を汲んでどう変わったのかを読み解こうと考えてそのように取り組みました。しかし、子どもの実態に合わせた単元の違いはあるものの、学校の研究を汲みでの変化は大きくは感じられませんでした。それぞれの学校の研究主題は共通している部分が多くあり、先生の中で大切にしている部分は、学校が変わっても大きく変化するものでは無かったのだらうと感じました。

また、学力のあり方を考察するために、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校および特別支援学校の学習指導要領の改善について(答申)」を検討しました。私は合同カンファレンスで読んだ「今後の青少年の体験活動について(答申)」や「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会一論点整理」と関連させて読みました。教育の目的、学力の重要な要素、子どもたちの現状と、それに関する学校教育における問題、家庭や地域・社会全体の問題などについて理解を深めることができたと思います。

身近な学校の紀要を読み解き、公的な資料を読み取ることで、各学校で行われている研究や取り組みは様々ですが、その大本には教育基本法や学校教育法、「生きる力」の育成という理念があるということを再認識しました。時代が変わっても、学校を異動して取り組む研究の主題が変わっても、教育の目的はいつでも「一人一人の人格の形成」であり、私が読んだ実践をされた先生の考えも、そこに根ざしていたのだなと思いました。

現場から少し離れて、しかし現場での経験をもって理論に触れることができる木曜日は、頭がとても疲れる充実した一日になります。今月は、学校の研究や取り組み

がしっかりつくられているからこそ、そこで働く教師一人一人が、教育の目的や理念をしっかり心にもっている

なければならないということ、そして、自分の中にぶれない「柱」をもつことの大切さを感じました。

教職専門性開発コース2年／福井大学教育地域科学部附属中学校 鈴木 馨

「今年から、教職大学院のニュースレターに週間カンファレンスのレポートを盛り込みます。初めての試みだから頑張ってるね。」大学の先生がこうおっしゃった。「今年はそんな面白いことをするんだ。自分たちがやっていることを伝えることができる良いチャンス。でも面白い試みだけれど、最初に書く人は大変だろうなあ…」正直そんなことを思っていた。しかし、名簿を見てびっくり。なんと、自分の名前が最初に書かれているのではないかと。そして隣には、同学年の天谷さんの名前。議論に議論を重ねた結果、もう1人の担当である天谷さんが、木曜カンファレンスについて詳しい説明を書いてくださることになったので、4月担当である私は、木曜カンファレンスの日程に入っている「主担当企画」について少し詳しく述べたいと思う。

最初に、主担当企画について説明したい。月ごとに替わる主担当メンバー（院生）によって行われる企画が主担当企画であり、木曜カンファレンスの中に組み込まれている授業のひとつという位置づけである。主担当メンバーは主に配属校でまわっている。今年度の主担当月は、4月が附属小・中、5月が至民中、6月が啓新高、7月が丸岡南中、夏の集中講義を挟んで、10月が中藤小・美浜中、11月が丸岡南中、12月が至民中、クリスマスに冬の集中講義を挟んで、1月が中藤小・美浜中、2月が附属小・中である。主担当月は、簡単に決まるわけではない。決してじゃんけんではなく、「どの月で、どんなことをしたいのか。その月でその企画を行う理由は何なのか。その企画を行う意味は何なのか。」ということ全員が考え、意見をぶつけ合う。幸か不幸か、前年度と同様、始めと終わり（4月と2月）を附属小・中が担当することになった。

主担当の月が回ってくる時、事前に「主担当会議」（主担当会議）を行う。会議をする場所は、配属校であったり、大学の院生室やコラボレーションホールであったりする。今年度、4月最初の主担当会議は附属中学校で行った。まず、「それぞれ、4月にどんなことをしたい？」という言葉から始まった。4人がそれぞれ意見を言い合ったのだが、方向性としては、「年度初めに、『柱』となるような目標を立てる」ということでまとまっていった。次に、主担当企画のテーマを決めた。主担当企画は授業の一環ではあるが、院生が企画・運営することができ、自分たちのチャレンジを教職大学院の先生方が手助けしてくださる。もちろんテーマも自分たちで考えるのだが、何しろこのテーマ決めは毎回時間がかかる。その月でやることが含まれていて、尚且つ印象的なテーマ。話し合いの結果、4月のテーマは、「Re:START」に決定した。「Re:」は「再」、「START」は「スタート」、「」は「ダッシュ」と読む。意味としては、「Re:」は自分自身への返信、自分の捉え直し。「」は数学の図形問題のときに使うダッシュをイメージした。意味としては、もう一つの視点、新たな視点、違う視点からとい

う意味である。この土台の意見は、頭の柔らかいM1の田中さんと田村さんが考案したものである。主担当会議はM1、M2がお互いに協力し、対等に意見をぶつけ合う。主担当で企画を練って、1つの企画を作り上げていくことで、配属校の連携も高まっていく。そして、4月の全3回の中でどのように企画を進めていくのかということ話し合った。M1が「まだ顔合わせをして間もないし、M1の顔と名前が一致しないなあ…。ましてM2は更にわからない。」と発言し、M2が「去年は、木曜カンファレンスの最初に簡単な自己紹介を行ったよ。今年も最初にそういうことができるといいなあ。去年自分がそうだったけど、確かに今はわからないことだらけだね…」と答える。いろいろ意見を交わした後、1回目の主担当企画で教職大学院版自己マトリックスを試みてはどうかという意見が出てきた。自己マトリックスとは、紙の中心に自分の名前を書き、自分に関係する、連想する言葉を単語で書き込んでいく。そして連想した単語をつないでいく。4～5人のグループになって、一人の紙に対して他のメンバーが質問をしていく。私たちは自己マトリックスを改造して、書き込むことをインターン先での経験（M1は大学で何をしてきたのか）に絞った。教職大学院版自己マトリックスを考えた。書き込む内容を変えた理由は、単なる自己紹介で終わらせたくないという理由である。M2はインターンでの経験を話すことにより、自分自身の振り返りになる。M1は、M2の経験を聞いて少しでもインターンをイメージすることができたらと考えた。主担当会議は2回目、3回目も1回目と同様に話し合い、2回目は「深く掘り下げて、経験をもう一度語り合う」、3回目は「『柱』目標を立てる」という案がでてきた。

今回の主担当企画がそうであったように、ふたを開けてみると、自分たちが立てた計画が思い通り進まないこともある。むしろその方が多い気がする。予定どおりしても、方向が少しずれてしまうときもある。しかし、自分たちが時間をかけて考え、練り直した企画であるからこそ思い入れがあり、「それなら次はこうしたい!」というような欲求が生まれてくる。主担当会議に行き詰ったときには、大学の先生方の助言を求めて研究室に赴き、大学の先生方も巻き込んで議論をする。大学の先生方は、自分たちの意見を親身になって聞いてくださり、的確なアドバイスを、ときには厳しい言葉をかけてくださる。主担当企画を仲間と考えることは幸せなことであり、長期インターンシップとはまた違ったことを学ぶことができる。他の主担当がどんなことを企画するのか、自分たちの企画を、どのように継いでくれるのかということを考えるのも一つの楽しみである。長期インターンシップで学んだ実践を、大学で学んだ理論と結びつけることも大切であるが、これからは教職大学院で学ぶことができる「経験」も、もっと積極的にインターン先で生かしていけたらと思う。

◆ 教育改革の展開を踏まえ、長期的な実践の展望をひらく

April

合同カンファレンスに参加して

スクールリーダー養成コース2年／教育研究所

山本 寛

4月の合同カンファレンスに参加した。昨年度は、先生方が語られる話の中の単語の意味が分からず、何を話されているのかははっきりと意味が理解できない状態であった。何をやっているか、何を求められているのか理解できないまま、ただ、資料を読んだり、報告書をまとめたりするためだけに与えられた時間が過ぎていき、考えもまとまらないままグループで発表するというカンファレンスの繰り返しであったことを思い出す。理論書を読んでも、「木を見て森を見ず」の状態で、書かれていることの本質を大局的に捉えられなかったように思う。1年が過ぎた今年度は、何を求められていて何をすればよいかということが以前より理解できるようになり、心に余裕を持って参加できるようになったと感じる。少しずつではあるが自分が大学院生として成長していることを実感することができるようになった。

1日目の「教育改革の展開を吟味し、学校での実践を捉え直す」では、「高校教育の質の確保・向上に向けて」（文部科学省）と「教員研修の在り方検討会報告」（福井県教育委員会）の2つの資料を読んだ。「高校教育の質の確保・向上に向けて」には、高校教育の質の確保・向上をさせていくための施策として、基礎学力の確保のための達成度テストの導入や多面的な評価、ICTの授業での活用、指導力のある教員の育成などが挙げられていた。それらはどれも高校教育の質の確保に有効な方法であると考えられるが、一番有効なことは、指導力のある教員の育成と学校組織運営体制を充実させることではないかと強く感じた。

福井県でも、指導力のある教員の育成と学校組織運営体制を充実させるために「教員研修の在り方検討会」を立ち上げ、教員研修の充実や見直しを行い、現教職員の資質能力の向上を図っている。主な研修の改善の方向性は、①個々の教員の資質能力の向上を学校全体の教育力

向上につなげること②教員の研修への意欲の向上③教員のキャリアやライフステージに応じた、知識・ノウハウの習得、の3つである。これらは、教育研究所が実施する教員研修にも取り入れられ、教師力向上に向けた支援の取り組みが具体的に実施されている。

2日目の「長期実践研究報告を読む」では、金森誠『組織の活性化による研修・研究の改革』（No. 159）を取り上げた。ここでは、小さなコミュニティから大きなコミュニティへ課を横断して新しく作り上げられた協働研究会の立ち上げの困難な歴史とその困難をどのように克服していったか、その成果、具体的には、要請研修ユニット開発と改善、全国教育研究所大会の企画運営の取り組み、研究発表会のゼロベースからの企画についての実践の様子が記録されており、協働研究会の作られた理由や背景、推進役としての作者の苦労等が読みとれた。また、組織が学び合う集団として機能していくためには、組織改革の推進役であるリーダーの存在やプロジェクトの存在、取り組みの進め方、記録をもとに語り合うことの大切さ、コミュニケーションを深めるための手立てが必要であることがよくわかった。今後の私の実践に大いに参考にしていきたいと思った。

最後の「自分の実践を紹介する」では、これまでの自分自身の授業実践、カリキュラムづくり、教科学習の経験を語り合った。グループには、校種の異なる先生方が集まり、高校での授業改善の取り組みと小・中学校での授業の進め方の違い、高校と小・中学校での教科書の作りの違い、ICTの活用、カリキュラムについて意見交換がおこなわれた。小・中学校での様子を聞くことは高校に勤務するものにとっても新鮮であったし、いま学校現場を離れている私にとって教科の話をするとはとても楽しい語り合いの時間となった。

教職専門性開発コース2年／丸岡南中学校

山本 泰平

先輩からの教職大学院1年目を一言で表すと「苦行+」であると言われてはや1年、まさにその通り「授業」「生徒とのかかわり」「部活」「自分の立場」と小

さな悩みから大きな悩みまで自分と向き合い、生徒と向き合うことに苦心しました。しかし、そのたびに助言を与えてくださる大学院とスクールリーダーの先生。時に

厳しく、温かく支えてくださるストレートマスターの先輩や愚痴に付き合ってくれる同期に支えられた「苦行」ではなく、多くの「+」を手に入れることのできた1年でした。

いよいよ始まった合同カンファレンス新しい先生に出会えることにわくわくしながら、2年目だからできる学びを探っていきたいと考えていました。そして、教育改革に関する資料を読む時に「ふっ」と自分の成長を感じることができた気がしたのです。昨年は読むことで精一杯。話し合いの場面では紹介にもならない話しかできませんでした。しかし、今年は違います。「なぜ?」「どうして?」というところにまで考えを巡らせることができるようになっていたことに少しの成長を感じることができました。

次は長期実践報告書を読み、実践の展開・実践者の成長、それらを支えた要因を探り、昨年の実践を見直して今後の見通しを持つ時間でした。私の今年の課題は「授業」です。研究授業というと1度限りで終わってしまうイメージがありますが、院生の中で紡いで発展させていく授業があってもいいのではと考え、尊敬する先輩の長谷川恵亮院生の「生徒の幸せを願う」を読みました。その中の授業実践を読み感じたことは「足でかせぐ」ことの大切さです。実践の中で長谷川院生は市役所に足を運

び資料集めをしていました。最近インターネットで大抵の資料を調べることができます。これは大変便利で上手く活用することは大切です。しかし、「足でかせぐ」(大学時代の研究を思い出しました。)ものはまた違うのではないかと改めて感じました。報告書の中で「授業の時間の設定上、生徒にはこちらで用意した資料しか提示することができなかつた」とあります。実際に足を運ばせることは難しいですが、できるだけ生徒に資料を選択吟味させることができる環境をつくってみたいのです。先輩の授業に乗っかるのではなく、紡いで発展させた授業をつくっていけたらと思います。

また、クロスセッションの中では スクールリーダーの先生から学校の研究体制についての質問があり、それに対して他の先生方がいろいろなアドバイスをされていて、「それ参考にします」「それやってみます。」とのやりとりがあり、教職大学院が先生方の協働に強く影響を与えていることを再認識できました。

毎回のことではありますが、合同カンファレンスのおかげで、自分の考えを整理し、先生からの助言をいただくことで、身を引き締めることができます。最後の1年、目を背けず壁に立ち向かっていきたいと思っています。

スクールリーダー養成コース1年／勝山高等学校 吉川 長利

新学期が始まって間もない週末、教職大学院での最初のカンファレンスに参加した。会場のコラボレーションホールにはすでに大勢の方々が来られており、いくつかのグループに分かれて着席するようになっていた。観察してみると、それぞれのグループは私たちのようなM1と今年度2年目を迎えるM2の院生そして新進気鋭のストレートマスターの院生が混在するように構成され、そこにスタッフが加わる形になっていた。カンファレンスでは一人あたり10分程度の持ち時間でこれまでの勤務校での経験を振り返ったり、実践報告を読んでその内容を同じグループのメンバーに紹介したりすることが求められる。ところが初めてのことで、何分でどの程度の量を話すのかという見当が全くつかないうえ、まとまった内容のものを周りの方々に解りやすく伝えるということは、いざやってみるとなかなか難しいことだった。まとまりのないまま話していると、自分の話が迷走に近いものになっていることを実感し、そうすると焦りがうまれ、読んだ内容をそのまま読み上げ続けるという、情けない状態になってしまった。一方、自分に続いて話されたM2の方は、話の内容に前半、中盤、後半と区切りを入れてそれぞれの箇所を簡潔な言葉で紹介し、さらに読んだ実践のどこが優れているかについて考察を入れたり

していた。しかも予定された時間どおりに余裕をもって話を終えることができ、その手際の良さにすっかり感心してしまった。この話し方には大いに影響を受けたので、次に機会にはお手本になりたいと思った。一年後には自分もそのように話せるようになっていてほしい。

今回のカンファレンスでは、「プロジェクトチームの活動と教師の協働」という実践研究報告を読み進めた。実践研究報告の中には一高校教師の積み重ねられた数年分の実践が凝縮されており、読んでいくにつれプロジェクトチームの一員として奮闘する先生の迫力が伝わってきた。学校の中で全く新しい取組を行おうというとき、他の教員から同意を求めるのは想像するだけでも大変なことであり、反対意見を持った人たちと対立せざるを得なくなることも予想される。高校の場合、教科の専門性が高くなり、教科が異なると考え方も異なることが多いからだ。それにも負けず職員会議の前に他の教員を説得して回る場面にはこちらまで苦しくなるような気持ちを感じた。また、ある時には事前の説明を十分にしていなかったために、他の教員達との共通理解を得られず、後で後悔することになったりと、プロジェクトチームの一員として学校改革に取組む上では、相当な困難があった

ようだ。このように先生が実際に経験し学んだことがこの中には詰まっており、後から読んだものはそれを追体験し、そこから得られるものは多い。そのような実践研究報告が教職大学院では壁一面に並んでいて自分の手に取ることができる。実践研究以外にも、さまざまな校種

の先生方またスタッフの先生方から貴重な話をお聞きできることなど、初めてのカンファレンスはこれまではない経験ができる場だった。次回のカンファレンスではまたどのような新しい出会いと学びがあるのか、楽しみにしたい。

教職専門性開発コース 1年 / 中藤小学校 吉田 智保

入学して初めての合同カンファレンスが終了した。教職開発性専門コースで毎週行われる木曜カンファレンスとは異なり、スクールリーダーの先生方を交えての初のカンファレンスである。経験のない未熟な自分に語れることはあるのだろうか、大学で学んだ理論だけの固定概念でしか返答出来ないかもしれない、ただ恥をかくだけなのではないか…。たくさんの不安が頭をよぎり、開始前から気疲れをしてしまったというのが本音である。そんなことを考えていた初日ではあったが、終えてみると、たった2日間とは思えない程の新たな学びを構築することができた。感想を率直に申し上げると、「本当に勉強になった。」この一言に尽きる。

1日目前半は、「3つの種」を切り口とした実践的な自己紹介を行った。現職の先生方やM2の先輩の教育現場でのこれまでの経験を伺うことで、自分が知らなかった世界にただ感心するとともに、完全に委縮してしまった自分がいた。後半は教育改革の資料を吟味し、内容・感想を語り合う活動を行った。前半であまり言葉を発せられなかった自分に対し、このままではいけないと思い、自分が話し易い内容である「教員研修の在り方検討会報告書（県教委）」を選択し、吟味した。本当は他に興味のある資料もたくさん存在したが、しっかり話すことに囚われ過ぎていたため、大学在学時に行っていた研究題材を選択した。この選択は、一見「逃げ」に思われるかもしれない。しかし、じっくりと資料を読み、それをグループで語り合う活動を行うことで、私の独りよがりな意見を打ち破ってくれるような新たな発想や視点を発見することができ、自分の研究と照らし合わせ、より深く掘り下げるきっかけとなった。また、それぞれ異なった資料を紹介するため、様々な教育問題や答申など、教育改革の視野も広げることができた。

2日目はまず、長期実践報告書を通じて展開や実践者の成長、それを支えた要因を読み解いた。また昨日とは一変し、新しいグループで語り合った。私は高間恵美先生の「教師の協働による学校づくり」を選び、教師協働の必要性について考察した。その際、スクールリーダーの先生方から、教師協働が謳われているが、小学校では学級王国、高校においては教科王国となりがちであるといった現状も耳にした。現状を打破しなければ学校は変

わらない。そのためにはどうしたら良いかについても実践報告書をもとに討議した。私はまだ数週間のインターンでしか学校に関わっていないが、教師協働をより実感していくためにも、インターン生として先生方に積極的に関わっていこうと強く思った。

そして最後に、教科別に自分のこれまでの実践を紹介した。英語科のグループでは、メンバーそれぞれ小・中・高と校種が異なっていたのだが、話し合いを進めていく中で、どの話題も一貫性を持っているものであることに気づかされた。特に、いかにして児童・生徒の英語に対する意欲を高めるかという課題では、中学・高校に限らず、必修化となった小学校の外国語活動でも重要な討議となった。英語教育の早期化が進められている中で、その目的は英語に慣れ親しませ、コミュニケーション能力の素地を養うことであるが、必ずしもプラスの方向に向かうとは限らない。小学校段階で英語を苦手と感じ、中学校に進む際には英語が嫌いになってしまい、英語に対する意欲の低下に繋がってしまうことも予測される。中高での授業の工夫や教材研究による生徒の英語への意欲向上策はもちろん大切である。

しかし、今後教科化にも向かう小学校の英語教育において、英語を好きにさせるというよりも、いかにして嫌いにさせないかの努力が必要になってくると今回この討議の中で再確認した。今後の授業実践で課題にしたいと考えている。

初めての合同カンファレンスは自分の中の不安から始まったが、未熟な私でも発言をすれば耳を傾けてくれるという温かい環境の中で、意見を共有し、課題解決に向けての貴重な学びを得ることができた。合同カンファレンスを通じて、スクールリーダーの先生方と私たちストレートマスターに共通して感じたのは、学校を、自分を、教育を、そして児童・生徒を改善していこう、良くしていきたいという気持ちである。そのためにも、経験や校種、教科の垣根を越えて意見を持ち合い語り合うという場は、自分の実践を独りよがりせず、更に高めていくという点で必要不可欠なのではないだろうか。私は学生でありながらも、教える立場にもいる。そんな立場だからこそ言える意見があると思う。未熟で現場知らずな発言もあるかもしれないが、次回は今回以上に自分の考えも発信していきたい。私たちストレートマスターを含め、それぞれフィールドは異なるが、同じ福井大学教職大学院の学生としてこれを機に更に学びを深めていきたいと強く感じた。

実践し 省察する コミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル
2014 summer sessions

2014.6.21-22

福井大学総合研究棟V（教育系1号館）／AOSSA

6/21 Sat. 12:40-17:40

Zone A 学校 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ／教師のやりがいが生まれる学校

これまでZone Aでは「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」をテーマとして、昨年度は6月「協働を創り出す」3月「世代を超えて協働する学校」をサブテーマに設定し、子どもたちの豊かな学びを支えていくために、学校全体のコミュニティを活性化し、協働していくことを考えてきました。その中から見えてきた「やらされ感」「温度差」といった課題、立場や世代、考え方の違い、それらを超えてみんなが協働するには1つの大きな共有ビジョンが必要です。その共有ビジョンをどう設定するのか。これまでのラウンドテーブルの学びを経て、その鍵は「子どもの姿」の中にあり、子どもたちの本当の豊かな学びにつながるビジョンこそが、教師のやりがいにつながっていくのではないかという一つの結論を得ることができました。今回はその「やりがい」に焦点をあて、「教師のやりがいが生まれる学校」について、学校改革・授業改革の実践事例を手がかりに、議論を広げ深めていきたいと考えています。

Session I ポスターセッション 12:40-13:50

福井県内外の小学校・中学校・高校・特別支援学校から、教師の「やりがい」につながる学校づくりの実践についてポスター報告が行われます。ポスター報告にもとづき、各校及び参加者で互いの実践を交流します。

Session II シンポジウム 14:00-15:20

「教師のやりがいが生まれる学校づくり」

〈報告者〉宇都宮大学 准教授 原田 浩司先生（栃木県鹿沼市立みなみ小学校 前校長）

福井市安居中学校 加藤 学先生

〈コーディネーター〉 国立教育政策研究所 統括研究官 千々布 敏弥氏

教師のやりがいにつながる学校づくりについて、それぞれ管理職とミドルリーダーの立場から、そのプロセスを語っていただきます。さらにコーディネーターを通して、参加の皆さんとともに、実践の意義について考えていきます。

Session III フォーラム 15:30-17:40

先の2つのSessionを受け、学校改革・授業改革に挑戦している福井県内外の学校から協働研究の具体的な報告をしていただきます。クロス・フォーラムを設けて各学校の挑戦を傾聴し、議論し、共有していきます。

〈報告者〉 北 典子先生（本郷小学校校長）・高橋和代先生（麻生津小学校教頭）

富士健一先生（嶺南教育事務所）・金子 奨先生（埼玉県新座高校）

江頭正次郎先生（佐世保市立早岐中学校）・坂下博行先生（武生第一中学校）

Zone B 教師教育

教職大学院をイノベーションする～教職大学院を担う教員の資質能力向上に向けて～

Zone B（教師教育）では、3月に行った「教職大学院をイノベーションする」の第二弾として、今回は教職大学院を担当する大学教員の資質能力向上に焦点を当てます。理論と実践の融合、研究者教員と実務家教員の協働といったことが設置当初から求められていますが、ここで改めて、教職大学院の教員としてどのような資質能力が求められ、それに向けてどのような取組ができるのか、実践を問い直し、議論していきたいと思えます。

Session I ポスターセッション 12:40-13:50

福井大学教職大学院が取り組んでいる教師教育改革に関わるポスターを複数掲示し、議論します。

Session II シンポジウム 14:00-15:20

「教職大学院を担う教員の資質能力向上に向けて」

教職大学院を担う教員の資質能力向上に向けて、いま何が求められ、どうあるべきか。そのためにどのような取組の可能性があるか。様々な立場から問題提起を行います。

〈シンポジスト〉 予定

- 文部科学省教員養成企画室より
- 教職大学院設置審査に関わってきた立場から:村山紀昭先生
- 福井大学教職大学院におけるFDの実践

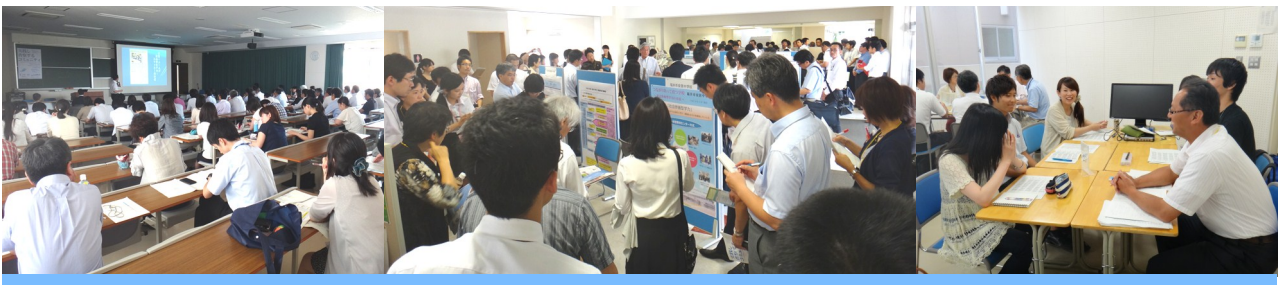
Session III フォーラム 15:30-17:40

「教職大学院の教員像とは」

前半は、福井大学教職大学院で今進みつつある取組について、4つの視点で話題提供を行います。それを踏まえて後半は少人数のグループに分かれ、教職大学院を担う教員に何が求められ、そこに向けて何ができるか、協議していきます。

話題提供コーディネータ：松木健一（福井大学）

- 教職大学院を担当する教員の資格をめぐって
- 附属学校と大学を兼ねる教員として
- 県内外の教育委員会から大学への人事異動を経験して
- Ed.D.に関する英米の現状から



Zone C コミュニティ 学び合うコミュニティを培う

Zone Cでは、地域コミュニティの発展を支える自治と学習、そして、そこでのコーディネーターの役割をテーマとして、実践交流を積み重ねてきました。特に、ここ数年はコミュニティの発展における「持続性」をめぐる問題に焦点を当て、互いの実践から学び合ってきました。

知識基盤社会という言葉に象徴されるように、21世紀を生きる私たちが地域や職場で出会っていく課題は、個人的・個別的な取り組みでは必ずしも解決しえない、より複雑で高度なものへと変化し続けています。それにともない、Zone Cでテーマとしてきた地域の発展を支える自治や学習においても、その持続的な展開をどのようにコーディネートしていくかがこれまで以上に問われています。これは、世代をこえてつながり学び合うことをどのように支えていくことができるのかという課題への挑戦でもあります。

Zone Cは、福井市教育委員会生涯学習室・福井市中央公民館の協力の下、今回もJR福井駅東口前のAOSSAでの開催となります。

Session Iは、ポスターセッションです。AOSSAのフロアをまたぐ空間的な広がりの中にポスターを設置し、それを通じて互いの実践を交流します。Session IIのシンポジウムは、前回に引き続き「持続可能なコミュニティをコーディネートするーコミュニティをひらき支える広報と記録ー」と題して、コミュニティの持続的な発展を支える「広報と記録」の持つ力に注目した問題を提起します。Session IIIのクロス・セッションでは、シンポジウムでの問題提起を踏まえながら、6人程度の小グループを組み、地域・世代・分野をこえて互いの活動を交流・共有していきます。

多くの皆様のご参加・ご来場を心よりお待ちしております。

Session 0 オリエンテーション 12:40-12:50 AOSSA 6階（参加受付ブースあり）

Session I ポスターセッション 12:50-13:50 AOSSA 4階アトリウム・5階展示スペース

Session II シンポジウム 14:00-15:20 AOSSA 6階

「持続可能なコミュニティをコーディネートする ーコミュニティをひらき支える広報と記録ー」

Session III フォーラム 15:30-17:40 AOSSA 6階

小グループでの実践交流

*6月21日、Zone Cの会場はJR福井駅東口のAOSSAになります。また、2日目の実践研究福井ラウンドテーブルの会場は福井大学文京キャンパスです。ご注意ください。



Zone D 授業 授業改革の扉を開く ー質の高い学びを生む問いとは？ー

去る2014年3月。Zone Dが問うたのは「問いはどこから生まれるのか?」。発表者から参加者に「授業を支える問い」にまつわる多彩な物語が投げかけられ、会場には「教師、教科、場面に応じて生まれる多様な問い」をめぐって対話が紡ぎ出されていきました。

多彩が引き出した多様な対話は、根幹への深化を求め、次回へ向けた新たな問いを生み残しました。「多様性の中にある共通性とは?」、あるいは「子どもたちに質の高い学びを生む問いとは?」「そもそも質の高い学びとは?」

来る2014年6月。Zone Dが問うのは、このような問いです。授業における問い、学びのあり方について、具体的な実践の物語に耳を傾け、深め合います。

Session I ポスターセッション 12:40-13:50

「質の高い学び」を授業で具現すべく授業改革に取り組むプロセスについて、県内外の複数の教師がそれぞれの授業の実践と省察にもとづいてポスター発表します。「質の高い学び」をキーワードに、授業改革の扉に触れられる時間です。

Session II シンポジウム 14:00-15:20

Zone Dのテーマについて、「授業の問い」をキーワードとして参加者で共有します。報告者の発表を起点に、教科に限らず質の高い授業に対する多様な意見を交流します。そもそも、質の高い授業とはどのようなものなのでしょうか?

Session III フォーラム 15:30-17:40

小グループで、「質の高い学びを生む問い」について議論を深めます。報告者の報告を振り返りながら、授業の方向性やそこに内在する問いについて意見を交流します。多様な問いに対し、我々はどのように向き合っていけばよいのでしょうか?

〈報告者〉福井市立森田中学校教諭 南部隆幸先生（理科）

川崎市・私立カリタス小学校教諭 加藤木智子先生（国語）

敦賀市・私立敦賀気比高校講師 滝田知佳先生（美術）

6/22 Sun. 8:30-14:00

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面に共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

参加申し込みの方法は、福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご覧ください。あわせて、6月22日のラウンドテーブルの実践報告者を募集しています。ご希望される方は入力フォームからお申込み下さい。



平成26年度 福井大学教員免許状更新講習について

福井大学教職大学院 教授 松田 通彦

平成21年4月に始まった教員免許更新制において、教育職員免許法第9条の3に基づき開設された教員免許状更新講習が今年度で6年目を迎える。教員養成系学部を有する大学には、この制度の目的である最新の知識技能の修得の場としてのミッションを果たすことに関して、大きな期待が寄せられているのは周知のとおりである。

本学においても、受講者の先生方に満足いただけるよう、毎年いずれの分野・領域においても、創意工夫に富んだ講座を積極的に開設してきている。特に、必修領域（教育実践と教育改革I）を担当する教職大学院では、「新しい時代をひらく教師の実践コミュニティ——実践の経験と知恵を共有するために語り聴き・読み綴る——」をキーコンセプトに、専門職として探究し合う新しい方法を採用入れた講習を実施しているが、プログラムの特色として次の点を強調している。

教職大学院の教師教育のノウハウを活かして、「実践・省察」を重視した講習にしていること

少人数による話し合いを基本とし、そのグループ編成は校種、年齢、地域、教科等の枠組みを解いたものにしていくこと

必修領域12時間に、選択である「教育実践と教育改革II」6時間を加えて、連続3日間の計18時間で一括りとする講習を提供していること

具体的に述べると、1日目は、受講者が作成した自らの教育実践をまとめたレポートの報告から始まる。実践の経験を交流し課題意識を共有するために、グループのメンバーで語り合い・聴き合いを行うためである。その後、グループ内で、多くの優れた実践事例資料を読み深め、展開の筋道をたどる活動に取り組む。2日目は、1つの実践事例を取り上げて考察したことを各自レポートにまとめ、その後、新たなメンバーで構成されるクロスセッションの中で報告会を行う。3日目は、教師としての自分の歩みを振り返り今後の展望を拓く目的で、自身の教育実践レポートの作成に取り組み、その後、クロスセッションを通して省察を深めるという流れになっている。

レポート作成や報告に必要な時間の確保、比較的新しい優れた実践事例資料の収集、ファシリテーションのスキル向上等、解決すべき課題は少なくない。しかしながら、事後評価アンケートから垣間見える受講者のニーズや要望に沿うべく、絶えず改善を重ねてきたつもりである。今後とも、一層充実した講習にするため、細心の注意を払いながら丁寧な運営を心がけていきたいと考えている。

講習の詳細については、以下のとおりである。

対象の職種 教諭および養護教諭

講習名 教育実践と教育改革I（教育の最新事情）・・・必修講習部分（2日間）
教育実践と教育改革II（教育実践の省察と展望）・・・選択講習部分（1日間）

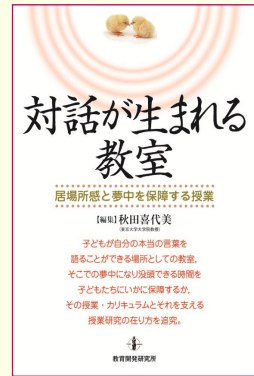
日程・会場 ※3日間とも9:00~16:20 各回とも上段が必修講習部分で下段が選択講習部分

- ①平成26年 7月23日（水）～7月24日（木）
平成26年 7月25日（金） 3日間とも福井県自治会館
- ②平成26年 7月30日（水）～7月31日（木）
平成26年 8月 1日（金） 3日間とも福井大学文京キャンパス
- ③平成26年 8月 6日（水）～8月 7日（木）
平成26年 8月 8日（金） 3日間ともプラザ萬象（敦賀市）
- ④平成26年 8月20日（水）～8月21日（木）
平成26年 8月22日（金） 3日間とも福井大学文京キャンパス
- ⑤平成26年12月24日（水）～12月25日（木）
平成26年12月26日（金） 3日間とも福井大学文京キャンパス

書評

「対話が生まれる教室」

編集：秋田喜代美（東京大学大学院教授） 教育開発研究所（2014年発行）



福井県教育委員会からの依頼で福井県内の指導主事研修での講義を担当した折に、その内容を執筆することになり、本著の一部に掲載していただいた。できあがった本著の全体を改めて読んでみて、まず感じたことは、教育は本当に多様な人々の手に担われているということである。「対話の生まれる教室」は教師と子どもだけで創られるのではない。実に多くの人が、「子どもたちが自分の本当の言葉を語ることができる教室、夢中になり没頭できる時間」を保障するために長い時間をかけ、丁寧に研究し学び続けている。

第1章では、「教室という複雑で絶えず変化する場の対話をどう捉えるか」という視点を紹介するために、教室の対話についての学術研究をもとに構成されている。研究者による「援助要請（東京大学 山路氏）」「対話における位置取り（宇都宮大学 司城氏）」「経験からの類推による対話（東京大学 三輪氏）」「ボライトネス理論（東京大学 川島氏）」といった研究は現場の教員にとって意識してみたことのない角度からの捉え直しであり、こうした視点で授業を振り返ってみることは大変興味深い。「対話の生まれる教室」への確かなイノベーションの可能性が感じられる。

第2章には小中学校のさまざまな実践が紹介され、ここには「対話の生まれる教室」の実際の姿がぎっしりと描かれている。福井大学附属中学校 森田史生氏の実践も掲載

されている。対話を生み出す学びの鍵は、単元を通した主題にある。子どもとともに創りあげる必然性のある主題によって、対話を生み出す協働の学びに繋がっていく。社会科の授業の中で「もはや戦後は終わった」のひとつ言から紡ぎ出される対話が生き生きと描かれている。

第3章では教員同士の対話に焦点を当てる。豊かな対話が生まれる校内研修をどうやって創るか。福井大学 木村優氏は、教職大学院の拠点校である至民中学校での実践を通して「授業研究」と「地域連携」という観点から、同僚と地域が教師を支え、その意欲を高める校内研修の取り組みを紹介している。福井県教育研究所 牧田 秀昭氏は校内研修を進めるにあたって、実際に学校支援を行う指導主事への研修としての「指導主事等研究協議会」の取り組みを紹介し、これからの指導主事に求められる力量形成に言及している。

このように方法も視点も立場も様々ではあるが、すべてここに執筆した人々の願いは「居場所感と夢中を保障する授業」を創っていくことである。ぜひ、一読され、読者としてのあなた自身もこの「対話の生まれる教室」を創っていくことの一役を担っていただければと考える。

（小林真由美）

第49回 教育研究集会のご案内

研究主題

学びをつなぐ《探究するコミュニティ》（2年次）

—協働の学びの場を問い直し、学びの繰り上がりを生み出す—

期日 平成26年6月6日（金） **会場** 福井大学教育地域科学部附属中学校

当日日程

8:30	9:00	9:20	9:40	10:30	10:50	11:40	12:50	14:10	14:25	14:50	15:00	16:30
受付	全体オリエンテーション	移動	公開授業Ⅰ	休憩	公開授業Ⅱ	昼食	分科会	移動	全体会	休憩	シンポジウム	

シンポジウム

「子どもたちが学びを実感できる 協働学習を構築するために」

- 秋田喜代美先生（東京大学大学院教育学研究科 教授）
- 高木展明先生（横浜国立大学教育人間科学部 教授）
- 荒瀬克己先生（大谷大学文学部 教授（元京都市堀川高校校長））

思考力・判断力・表現力を培うことができる協働探究学習をどのように構築していくのか。子ども自身が実感するための学びは、協働の学びなしには生まれてこない。子ども自身に価値ある協働の学びを展開していくために、教師自身が何を考え、どのように子どもたちを導いていけばよいのだろうか。本校の実践もふまえて、講師の先生方から協働探究学習を展開していくための教師の意識改革や役割、具体的な働きやポイントなどについてご意見を伺いながら、考えていきたいと思っております。

その他

- 会費 / 2,000円
- 申し込み / 申込用紙は本校のホームページから <http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-j/> 郵送又はファックスでお願い致します。
- 送り先 / 〒910-0015 福井市二の宮4-45-1

福井大学教育地域科学部附属中学校 教育研究集会 受付係
TEL : (0776) 22-6985 FAX : (0776) 22-6703

※お申込締切りは、平成26年6月2日（火）



平成27年度 教育学研究科学生募集スケジュール (予定)

事項	平成27年度(第1回)		平成27年度(第2回)		平成27年度(第3回)	
	教職大学院の課程	修士課程	教職大学院の課程	修士課程	教職大学院の課程	修士課程
学生募集要項の公表	5月下旬		5月下旬		5月下旬	
事前説明会	7月5日(土) 13:00~17:00		12月20日(土) 13:00~17:00			
入学願書受付	9月2日(火)~5日(金) 最終日17:00まで		1月9日(金)~15日(木) 最終日17:00まで		2月26日(木)~3月2日(月) 最終日17:00まで	
ガイダンス	9月13日(土) 10:00~12:00	実施せず	1月31日(土) 10:00~12:00	実施せず	3月7日(土) 10:00~12:00	実施せず
学力検査	9月20日(土) 午前(9:00~)筆記試験 午後(13:30~)口述試験		2月7日(土) 午前(9:00~)筆記試験 午後(13:30~)口述試験		3月14日(土) 午前(9:00~)筆記試験 午後(13:30~)口述試験	
合格者発表	10月1日(水) 10:00~		2月17日(火) 10:00~		3月20日(金) 10:00~	
入学手続	12月10日(水)~16日(火) 9:00~17:00		2月26日(木)~3月2日(月) 9:00~17:00		3月23日(月)~25日(水) 9:00~17:00	

※5月・7月・10月・11月に福井大学教職大学院オープンキャンパスを開催します。また、県外での説明会も企画中です。決まり次第ホームページ上で公表しますので、詳細はホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご覧ください。

Schedule

6/21 sat-6/22 sun 実践研究福井ラウンドテーブル 2014

7/5 sat 合同カンファレンス 7/12 sat 合同カンファレンス (予備日)

【編集後記】

新緑がまぶしく輝きつつじの花が満開となって、自然の恵みを感じるこの頃です。

今年から教職大学院に入られたスクールリーダー養成コースの先生方、教職専門性開発コースの院生さん達の新しい学びが始まっています。M2の方々も新たな挑戦に向かっておられることでしょう。今月号は前号に続き、スタッフの自己紹介・院生さんの自己紹介と共に、4月に行われた「月間カンファレンス」やインターンシップをふまえた「週間カンファレンス」の報告があります。6月21日、22日のラウンドテーブルの最新情報も載りました。有意義な実践交流を楽しみに準備しております。(山野下)

教職大学院Newsletter No.63

2014.5.17発行

2014.5.17印刷

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp

